



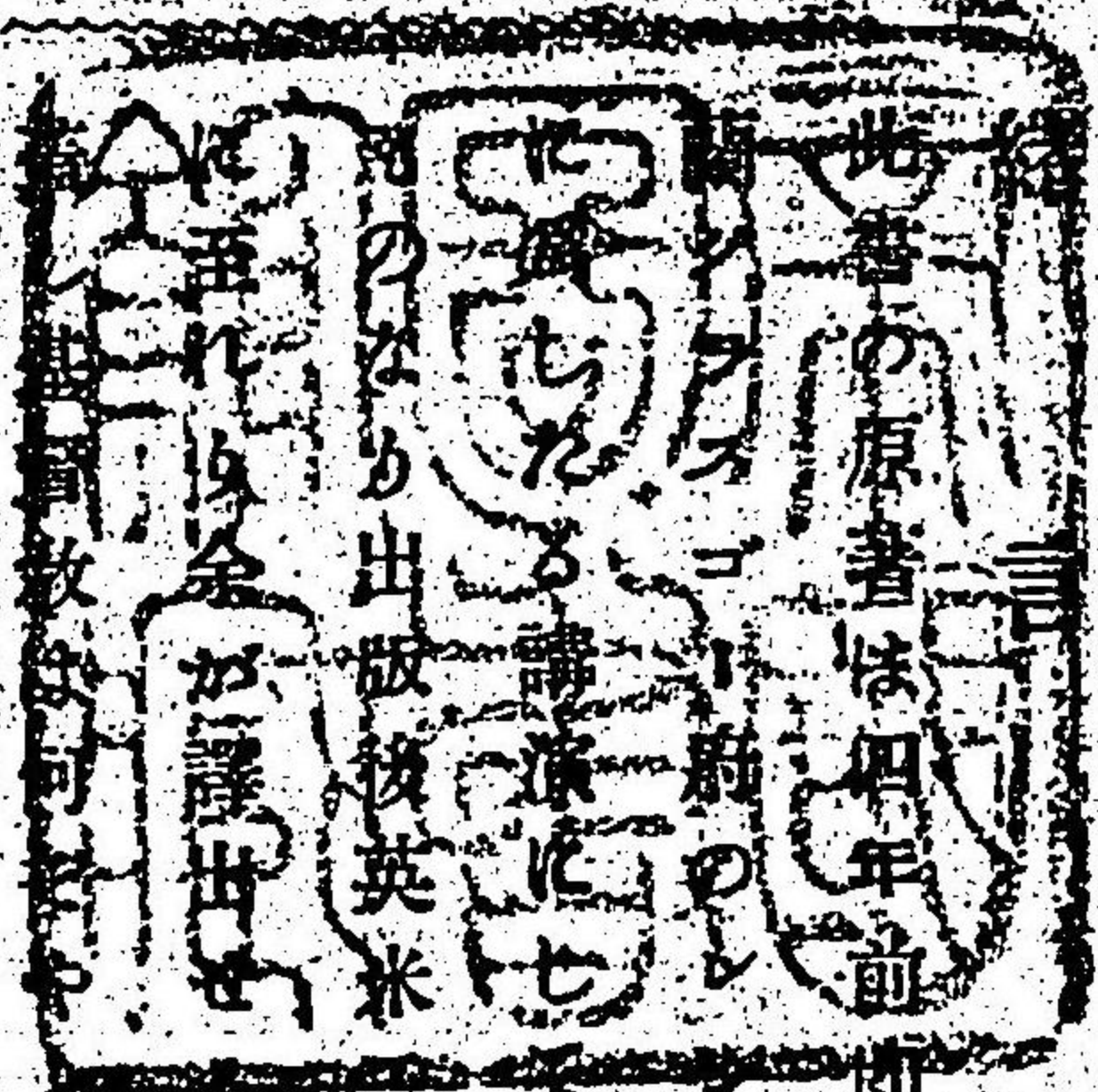
基督教市及學本日  
書叢盟同會東齊

# 基督之事實

英國

シムプソン著  
千磐武雄譯

東京 中庸堂書店



(一)

に於ては此の最簡なる問題も議論紛々殆ど人をして適從する所に迷はしむるものあり我國に於ても基督教は基督ありと爲すものと基督教は基督にあらずして基督の教訓なりと爲すものと議論將に漸く盛ならんとするの傾向あり此際凡ての偏僻を離れ敬虔の念を以て切實に『キリストの事實の意義』を再思するは最大急務に非らずとせんや此書或は未だ詳細なる條目を論述するに及はざるべしと雖

ち紀元一千八百九十九年の冬原著者が  
フィンランド教會に於て主として求道者  
最も簡潔に基督教の何たるやを論述したる  
國に於て好評噴々昨年第二版の出版を見る  
ものは即ち其の第二版あり  
は最も簡單なる問題なるが如しと雖も今日

(二)

も要を摘み英を含み必らずや誠實ある疑惑者の心を満足せしむるもの多かるべきを信す是れ余が自ら揣らずして敢て此書を譯出せる所以なり。

若し夫れ譯文の生硬ある譯語の穩當を欠けるものあるべきは原著者に對し又讀者諸君に對して余自身其罪を負はざる可からず且つ出版の期日急迫せる爲め充分なる修正を加ふること能はざりしは最も遺憾とする所他日更に改訂するの日あらんことを希望す。

余は猶ほ一言を附せずして止む可からざるものありそは此書を出版するに至るまで余に對つて幾多の助言を與へられ且つ周旋の勞を執られたる教兄柏井園君の深厚なる好意ありとす余は此に之を鳴謝するの意を表せざる可からず。

明治三十五年十二月一日 信州白田にて

千 馨 武 雄

(二)

第二 道は即ち神なり……………二二五

第五章

基督の事實の最後の意義……………二四二

第一 罪惡の實在……………一四七

第二 宥恕問題……………一六一

附論 贖罪の原理……………一八一

第六章

基督信者とは何ぞや……………二〇二

(二)

も要を摘み英を含み必ずや誠實ある疑惑者の心を満足せしむるもの多かるべきを信す是れ余が自ら搦らずして敢て此書を譯出せる所以なり。

若し夫れ譯文の生硬ある譯語の穩當を欠けるものあるべきは原著者に對し又讀者諸君に對して余自身其罪を負はざる可からず且つ出版の期日急迫せる爲め充分なる修正を加ふること能はざりしは最も遺憾とする所他日更に改訂するの日あらんことを希望す。余は猶ほ一言を附せずして止む可からざるものありそは此書出版するに至るまで余に對つて幾多の助言を與へられ且つ周旋の勞を執られたる敎兄柏井園君の深厚なる好意ありとす余は此に之を鳴謝するの意を表せざる可からず。

明治三十五年十二月一日 信州白田にて

千 馨 武 雄

# 基督の事實目次

## 第一章

基督教の基本.....一

## 第二章

基督の事實とは何ぞや.....二九

## 第三章

基督の事實の最初の意義.....五七

第一 基督教的品性.....六二

第二 道德の原動力.....七六

## 第四章

基督の事實の更に進歩せる意義.....九八

第一 信仰の基礎.....一〇二

(一)

第二 「道は即ち神なり」	一四五
第五章	
基督の事實の最後の意義	一四二
第一 罪惡の實在	一四七
第二 宥恕問題	一六一
附論 贖罪の原理	一八一
第六章	
基督信者とは何ぞや	一〇二

# 基督之事實



## 第一章 基督教の基本

英國 シムプソン 著

千 馨 武 雄 譯

曾て世界に出現せる宗教家の中最も偉大なる一人、或る日其弟子等に對つて一問題を發し其答に含まれたる實力を基礎として彼の教會を建つべきことを宣言したり、抑彼は何を以て宗教の眞諦とあし、又何を以て其起點となせしや此言に依りて發見するに難からず、蓋しイエスの爲せし如く宗教上の問題を説述するは、嘗に彼が最上の權威を有する基督教のみならず、亦一般に宗教上の問題を決するに於

て最も有効なる方法と謂ふべし。然れども其問題の果して如何なる問題ありしかを考察せば吾人を驚すものあり其の問題は勿論イエスがカイザリア、ピリドに於て其弟子等に對つて發したる「爾曹は我を曰て誰とするや」てふ問題を指す此の問題は素より注意すべき問題なりされど之を根本的のものと考ふるに至ては吾人之に驚かざるを得ず縱令宗教家自身に關することが多くの感動を與ふるものあるに拘はらず宗教家の傳ふる本來の眞理は常に宗教家自身よりも貴重あるに非ずや故に吾人はイエスが宗教上重要と做す問題は必ず神學上の信仰——例へば天に在す父を信ずるや——若くは重なる倫理學上の原理——例へば山上説教の道德法を承認するや——に關する問題あるべきを豫想せり然れども其實大に之に反し神に關する問題にもあらず亦道德に關する疑問にもあらず單にイエス自身に關する疑問なりき實に神

學上倫理學上の疑問にあらずして個人的疑問ありき而して之れに對する答は即ちイエスが熱心に力を込めて彼の教會を建つべきことを宣言したるものあり此事實は甚だ顯著ある事實にして吾人は容易に其意義を心に印するを得べし此の偉大なる教師は自己の宗教を彼れに對する弟子等の信念に基きて創建せんと欲せり彼の教會の建設とは即ち之に外ならず蓋し宣傳者の人格を以て宗教の根抵と爲すは宗教に對して不遜の甚しきもの然かも彼れは之を爲せり果して然らば是れイエスは基督教の基本をば主として彼れ自身の特異なる人格中に發見すべく人を指導せりと謂ふも敢て不可なきあり

若し此の如き論述にして偶然なる一事件よりも更に他の證據を要せずとせば遠く之を尋ぬるを用ひず直ちに他の教師等と全然相異れるイエスの教訓法に之を發見し得べし福音書の記事に従へばイエ



エが其弟子等を教練したる方法の特異點は、常に力強く彼自身を彼等に提供したるの一事にして、既に信用すべき論壇に於て、尋常事として一般に承認せらるゝ所のものなり。是れ草卒に福音書を讀む人と雖も、其注意を促さるゝものにして、之をモーゼ、イザヤ若くは洗禮のヨハネの教訓法に比し、更にプラト<sup>イ</sup>の「會話篇」或は「哥蘭<sup>コラン</sup>」を繕ひて之に較ぶれば、愈其然るを發見すべし。凡て他の教師等は唯真理の領域に人を指示しつゝあるを深く自覺するのみにして、其大教師と稱すべき者は、益永遠なる原則の前に自己を没入せんとす。然るにイエスは多くの人心嚮導者中に在りて、唯獨り最高原則を自己の人格中に吸收するを見る。永遠の生命を求むるものには、彼は「我に従へ」と言ひ、父を見んふとを欲するものには、彼は「未だ我を識らざるか」と問へり。他の教師中一人として未だ此の如き言を發せしものあるを見ず。誰か真理に就て、彼之を教ふるに非らずして、彼は即ち真理あるを

とを明言せしものありや、誰か神を見るに當つて、彼之を見るに非らずして、彼を見るに即ち神を見るあるとを公言せしものありや、誰か天下萬民の需むる休息を與へ、心靈の食物を與へ、氣力を與へ、宥恕を與ふるに際し、彼之を指示するに非らずして、彼に至りて之を見出すべきとを公言せしものありや、モーゼも、預言者も然せざりき。プラト<sup>イ</sup>も、佛陀も、モハメットも然せざりき。然せるものは唯イエスのみなり。然りイエスは常に、故らに、明らさまに之を爲せり。是れ最早一の異論もなき所にして、凡て他の教師より彼を區分する區分點とす。凡て他の教師等は真理の音信者たるを自認せるのみ、されどイエスは音信其物ありき。彼等は單に光明を携ふるものなり、されど彼は己を「世の光」と呼べり。彼等は唯真理を指示す、されど彼は「我に來れ」と言へり。是れ皆イエスの教訓の特異なる調子にして、彼が其弟子を教練するに當り、歩一步着々として實行せる所なり。されば賢明なる讀者

はカイザリヤ、ピリビに於けるイエスの談話の決して偶然なる一事件にあらず、寧ろ初より深き注意を以て計劃せられたるもの、最頂點にして、其歡迎すべき團圓を告げたるものなるを容易に理解するを得べし。

此の如く、宗教を宣傳せんが爲に來りしイエスは、故らに、且つ著しく人々をして彼自身に就て思考せしめたりき。炯眼ある獨逸の一學者が彼は人に自己の人格を指示する以上に神聖なる事業を知らざりきと言へるも亦宜なる哉。かく彼は神學若くは倫理學の系統を組織せんが爲に來らず、唯己自身を天下の人心に紹介し、彼の教理此の原則に就て汝如何に思考するやとの疑問に非らずして、キリストに就て汝如何に思考するやとの疑問を残し、以て彼等の思考に一任せり。是れ即ち前に言へるが如く、イエスは基督教の基本は彼の思想、教訓模範にあらず、主としてキリストの事實、即ち彼自身の特異なる人格

中に發見すべく、吾人を指導せりとの義に外あらざるに非ずや、更に他の卓出せる獨逸の學者、最も精細にして公平なる批評家カイムは「キリストの宗教は不思議にも彼の人格に歸宿す」と曰ひ、且つ「此根本的事實のみ唯之より出で來れる宗教を吾人に理解せしむ」と曰へり。されば基督教を理解せんには、少くも先づキリストに就て思考すること、即ち吾人の心意情緒及び良心は如何に彼を遇するやてふ一點に歸せざる可からず。

哲學者、殊に啓蒙時代Aufklärungと稱せられたる時代の哲學者はイエスを離れて、單に永遠ある道理の顯現として基督教を考究せり。然り、是れ素より基督教なり。近世の實際的學者は基督教を以て、主として道德的動機若くは道德的理想として之を討論せり。然り、之も亦基督教あり。然れども此の如きはイエスが其主題に到達せん爲に人々を指導せる方法にあらず、宗教上の問題を熟考せんと欲する人々に對する。

イエスの指導は、歸する所、カイザリヤビビに於ける問題の精神に外ならず、而して此際吾人の忘る可からざるは、彼は嘗て世界に出現せる宗教家中最も偉大なることはなり。

此に至りて、宗教問題の研究に一改革を生じたりと謂ふも可なり。是迄饑渴神を求めたる人の心を擾亂挫折せしめたる問題は、餘りに簡單に過ぐるが故に、其満足なるや否をさへ信じ難き程の状態に於て改述せられたり。而して此の如き改述は其出處の權威に關して、餘り重要視せられざりしも、之を重要視するの必要今日に如くものなかる可し。

現今宗教の問題に關し、其の兩側面に於て二個の注意すべき著しき状態あり、其の一側面に於ては不信仰は今や不可議論に歸結し、他の一側面即ち基督教内に於ては、何れか單純眞粹ある基督教なりやに關して、非常なる混雜と衝突とを來しつゝあり、而して少しく注意し

て此等の状態を觀察せば、余は兩者共に、少くも其一部分は、創建者の指導の如くに、基督教の討究に従事せざるより起るものあることを知り得べしと信す。

扱て不信仰は今や不可議論に歸結せり。吾人は最早ホルテールの時代にもあらず、自然神教者の時代にも在らず、又誰もシヤフツペリ・ド・ランド、ポリソソブ・クを讀むものあらざるへし。猶又、到底宗教なかる可からざるも、今日に於ては基督教に匹敵すべき宗教は起らざる可し。新佛教の如き夢想も人を改宗せしむるよりは寧ろ世の一話柄となれり。此等の事實は現代が基督教の信仰に賛同せるを示すものにあらずして、寧ろ強き嫌厭を示すものと謂はざる可からず。然れども、基督教の虚妄を論ずる如き反對論は、縱令盛なるも常に之に打ち勝つを得たれども、然れども多少の禮儀を以て、凡て宗教問題は人間の理解力以上に在るを以て、基督教も亦同しく益する所

なきを、婉曲に論ずる不信仰は、更に狡智なる強敵と謂はざる可からず。今日多數の人心を観察するに、其心狀前者に非らずして寧ろ後者なるなり。彼等は悪意を以て宗教を拒絶せず、多くの場合に於て之を信仰せんことを希望す、然れども彼等は皆不可議論者にして、宗教は即ち識り得可からずと稱す。

かくて宗教的信仰は最早ソクラテス時代と同じく美しき希望に屬するものより以上のものに非らざるに至れり。唯遠く隔りて確實ならず、又識り得べからざるものと見ゆるのみ。余は必しも不可議論の哲學的論述に關してのみ謂ふにあらず、思想ある多數の男女が宗教に對する一般不確定の態度に關して之を謂ふなり。かく思想ある人々の中に屢かゝる態度を見るのみならず、其最も恐るべきは、二三反對の實例なきにしも非らざれども、人民一般に之を怪むことあくして、宗教的信仰は遂に概然に過ぎざるものとあり、道德的熱情は去りて唯

完全に進むの助言と變し去るが如き危険あるも、更に之を咎むるものなきに至れることなり。

此の如き不確定の理由、此の如き不可議論の世に存在する理由は何ぞや、神及び靈魂に關する大問題に答ふることの困難と不可能とを感ずること、是迄より一層甚しきに至れるは正しく其理由にして、宇宙の起源意義茫漠として實に極め難く、人生の狀態糾紛として定まる所あり、吾人宗教の側面に立つて、此等に關して多くを語らんと欲するも能はざるものあり、自然は吾人之を知るを得へし、然れども縱令自然が無限者に到達するものとあるも、其處に何物ありて能く自然に相會するや、吾人之を知ること難し、信仰と不信仰との戰は監督バストラルとペーレあるに拘はらず、常に未だ其終局を見ざるなり。今日は神啓示、自由、靈魂不滅等の問題に就き肯定的に之を信じ得るもの多からず、然り而して此等の問題は吾人の理解力以上において

誰か能く之を知ることを得んや、眞摯ある人々は、ハイバルト、スベンサーを讀みて己の不可識論を哲學となし、淺薄なる人々は、オーマルカヤムを讀みて之を喜び、幾多の求道せる靈魂は遂に未だ満足する所あらざるなり。

今や靈魂の大教師は、此の如き人々——其不可識論は或は智識上の慢心たることもあらん、或は肉慾の放縱より來るものもあらん、又或は此兩者の孰れにもあらすして唯氣の毒なる不可識論あるものもあらん——に對つて宗教問題の改革的改述を以て來り臨めり。而して其告ぐる所は結局左の如し。曰く、汝は神に關する大問題に答ふる能はずと和す。然り是れ汝の理解力以上に屬す。來れ、他に此問題に近づく可き方法あり。請ふ汝に問はん、汝は我に對つて如何なる態度を取らんとするや、我が此疑問は如何なる疑問たるに拘はらず、答へ得らる可き疑問なり。汝の不可識論は之には適用し難し。縱し

神の存在は汝の理解力以上に在りとしてもキリストの事實は則ち然らず。彼は他の現象の如く認識し得へき歴史上の事實あり。而して此の答へ得へき疑問に對する汝の心意的、道德的結論は一見測知し難く見ゆる宗教問題の答辯の端緒たるなりと。

かくイエスは少くも答へ得らるゝほとに宗教問題を改述せり。彼は之を測知し難き領域より實驗の其れに招き出たせり。此は亦イエスと同じく不可識論に對する基督教の實際的答辯なり。故シテ、エイチリニウイスは其哲學史に於て、宗教は有効ある基本を智識に供すること能はざるを告白するが故に、眞正ある知識の域外に之を放棄したり。然れともイエスの研究法に従へば基督教は全然其の場合を異にせり。彼は自己の弟子等に基本の最明白にして近つき易きもの——彼等の面前に立てる自己の人格——を與へたり。彼の宗教の基本は實驗的事實に在り、又在りたりき。其基本は如何なる基本なりや

測知すへからざる信仰の領域に於ける、證明し難き原理若くは思想  
 系乎。然らず。爾等我を曰ひて誰とするや。爾曹はキリストについ  
 て如何に考ふるや。我は眞理あり。我に來れ。基督教の基本此に在り  
 而して此基本は他の事實と等しく、有効ある歴史的人格中に存す。イ  
 エスは宗教の基本はキリストの事實に在ることを宣言すると同時  
 に、廣濶明瞭の地に不可議論を驅逐したり。  
 勿論、廣濶の地に不可議論を驅逐したりとて、必しも之を敗北せしめ  
 たるにはあらず。縱令公平正直にキリストの事實に對するとも、之れ  
 必ず吾人を宗教的信仰に導くものにあらず。勿論更に之れが研究を  
 要するなり。然れども此に於て問ふべきは、宗教に對して不可議の態  
 度を取れる者の中幾人か此研究法を試みしやに在り。即ち彼等の幾  
 人がキリストの事實を面前に自己の心意、情緒及び良心に照らし  
 公明に、宗教に關して己れに對つて其の果して何をも意義するや。

なきやを問ひたりしや。素より誰も不可議論者たるの權利なしと謂  
 ふが如きは到底不可能のあとなれども、イエスが宗教問題の眞諦  
 且つ其起點と考へし此疑問——確かに答へ得らるゝ疑問——を以  
 上の如く熟慮したる後にあらざれば、誰も不可議論者たるの權利な  
 しと謂ふも敢て不可なきなり。されば宗教の大教師の指導せる方法  
 より何の補助をも得べからざるを確認するに非らずんば、吾人は決  
 して宗教の大問題を棄却すべきに非らざるなり。否、吾人にして若し  
 熱心あらば必ずや之を棄却すること能はざる可し。若し不可議論者  
 にして誠實ならば、宜しくカイザリヤ、ピリビに於て大切なる數日を  
 費やし、而して後、不可議論者たり得べくんば不可議論者たるも亦可  
 あらずや。

宗教問題を論述するイエスの方法にして、現代に於ける人心の特別  
 なる狀況たる不可議的傾向に對つて、此の如く直接ある意義を有す

とせば其他の人々には更に直接の意義を有せざる可からず、基督教を信ずるゑとは未だ現代の研究者に對する唯一の困難にあらず、更に他の最も大なる困難と稱すべきは、何れが果して眞粹の基督教なりや、之を發見するの難きに在り。如何とあれば、基督教國に於ては事々物々基督教ならざるはなきに、單純眞粹なる基督教は何ぞやとは是れ現十九世紀の問題なればあり。此の如き兆候は教會の内外に於て實に多く之を見るゑとを得べきなり。

教會の外面を見れば、吾人は最も重大にして勢力ある近世基督教批評學、即ち少くも破壞的にあらずして改造的と自稱する所の批評學に於て、此の如き狀態の現然として存するを認めざるを得ず。此等は基督教の頹廢を望まずして之を救はんと欲するものなり。此等は幾世紀間の傳説に掩はれ、腐蝕せられたる宗教に換ふるに、眞粹ある基督教を吾人に與へんと自稱するものなり。而して謂らく、基督教は今

後に於て猶ほ誕生すべきものなり、少くも誕生すべきものなり。批評學は、之が葬式を營まん爲に來れるにあらず、之が再誕を助けんが爲なり。如何とすれば基督教は最初の誕生の際、既に其搖籠中に絞殺せられたればありと、其著者が吾人に證言する如く、此精神と此目的とを以て、——二個の普く知られたる實例を擧ぐれば——「文學と教義」マシウ、ア  
ルノルド著及び「ロバート、ニルスミール」ハムコフイア、  
ルド夫人の著は書かれたるなり。

余は眞面目ある歴史的意義を以て禮儀を欠かずして、彼等に少しく智識的新分限者とも稱すべき氣味あることを言ひ得んことを望む。或は幾世紀間存立せる基督教の構造を毀ちて殆ど新に之を再築す可しと言ひ、或は基督教の主なる思想は根底より誤解せられたれば新に之を叙述せざる可からずと言ひ、或は聖ヨハネ、聖パウロに始まり、アマナシウス、アラガステン、ルイテルに由りて遵奉せられたる系

統社多々岐路に走りたる故に、別に新しき方向を取らざる可からずと主張するが如きは、一握千金の僥倖家の哲學らしく、稍歴史的基础を欠くの憾あるを免れず、彼等は曰く、如何に痛ましき過失の下に此の十九世紀間は勞せしよ、如何に使徒等は空虚なる香氣の裏に吾人を投せしよ、吾人は實に軌道を逸せり、若し夫れ師よりも甚しく哲學的なる聖書論者が、其の師傳記を草したる、若くは難に偏理論者より、眞正なる基督教の創建者と稱せられたる聖パウロが、基督教の歴史上、斯くまでも重要なる組織時代に出現せるが如きは、如何に悲むべき事なりしに、然り而して遂に「文學も教義」の著者の如き才幹ありて至誠ある紳士來りて、彼等と吾人とを正路に歸さんとし、又「ロバート・エルズミール」の著者の如き天才ある——且つ最も熱心なる貴女ありて、甚だ有益にして又甚だ便利ある有様に於て、如何に基督教の古き構造(物語)は半時間許の脚紳士談に由て脆くも破碎

し去られ、且つ其新むき構造(亦同じく物語)は「イ・ス・ト、ロンドン」の貧民窟に於てすら大なる革新力たることを示せば、亦感謝すべきか、此等の基督教改造説は必ず多くの價值を有すべし、如何とあれは、教會は常に過去の奴隷となり師父の引用語若くは信仰告白を以て眞理の終極と思惟するが如き危険あればなり、然れども教會は基督教の歴史を以て笑ふべき徒勞に終らしむるものにあらずるなり、されど此の如き單純なる解釋を吾人に與へんと欲する基督教改造説の世に歡迎せらるゝは甚だ顯著なる事實にして、何れが果して基督教をよりや、其傳説的記事は如何なる點まで眞純なるものとして信據するに足るや、此等に關して未確定のものあることを示すものなり、是れ現代人心の特別なる状況にして、何れの處に於ても基督教は既に十八世紀間の試験を経たれども、キリストの宗教は猶ほ試験せ



るらべしてふ定語を反響せしむる所以あり。人望ある今日の所謂批評家の多くは、最も單純なるキリストの宗教は何うやてふ疑問に對する答を吾人に與へんと企てつゝあるなり。

吾人眼を教會の外部より教會の内部に轉ずる時は、此疑問に答ふるの困難減少せりとは見えずして寧ろ増加するが如し。求道者は今や種々不齊一なる聲を聞きて適從する所に迷へり。世論が基督教の眞否に關する頗る困難なる問題に於て、敵味方の二陣に別るゝは左もて驚くに足らざるも、自ら基督教界の大家と稱するものにして、何れが基督教なりやてふ甚だ單純なる疑問に對して、數箇の學派若くは教派に分裂するは實に驚くべきあり。或者は教會の禮典に拘はり、或者は教義的信仰を重んじ、或者は行爲の道德を尊び、或者は信仰の内部的經驗と新生とを主張せり。一人の教導者は諸君の洗禮に關し、他の一人は諸君の悔改に就て諸君に問ふ所あるべし。甲の人は特にイ

エスの死に就て語るかと思へば、乙の人は諸君自身の生活に關して語るならん。而して斯く相異なる靈魂の教導者は往々彼等の見解が眞理の異なる各側面たることを拒み且つ實際上の目的と言明とを以て相互に相排斥す。信せざる者は罪に定めらるゝとの破門の語は通常左程に直裁ならざれども、亦屢論敵の間に用ひらる。然らば何を信せずば罪に定めらるゝか。教會の權威か、禮典の必要か、信條の確守か、贖罪の教理か、聖靈に由りて更生するの必要か、將た道德的生命の重大か。基督信者の家庭に於てすら、最も單純なる基督教の本質に關する疑問に於て、眞理の混亂を來すのみならず、亦往々相互の愛を失はしむるか如き争論を惹起することあるに至れり。

此内部の異論を信仰と不信仰との間斷なき大争闘に比すれば、決して莫大ありと謂ふ可からず。されば公敵の面前に於て、凡ての基督信者は宜しく攻撃の鋒を揃へ、又或は防禦の要點に力を集中すへきは吾

人の豫期せる所なり、然るに實際は大に之に反し、此の派は彼の派を罵りて批議の爲に交をも危くするものありとすれば、彼派は亦皮殻を棄てんとして凡の物を犠牲にするを辭せずと罵り返すなり。教會の不過誤聖書の無謬、信條の教義、奇跡、恩惠の教理等壞れ去らば、之れごと共に基督教も亦壞れ去る可きや、基督教社會の甲は然りと答へ、乙は否と答ふ、是れ戦亂の叫喚中に在りて、神の契約の櫃に對して震畏すべきや否を知らざる單純なる心の人々に取りては、實に甚しき疑念を感じて基督教の熱心なる反對家に取りても、自己の全力を擧げて攻撃したる點は、屢眞の戦線内に在らざるを告げらるゝか如き、亦頗る不滿の種となるなり、此等の結果は

撃ちつ遁れつ乱れ戦ふ  
あやめも分ぬ闇の夜に。

こゝる時句の如し、虚實相雜り、勝敗定まらず、基督教爭論の記録中未だ

さ曾て此の如き實例を見ず、斯る混乱は或る時は知識上其他に於て、壯大を極めたることあらんも、然し又悲惨なる事となり、然かも戦には非らず、眞理と誤謬、光明と暗黒、信仰と不信仰との戦には非らざるなり。

此の如き混乱の裡に在りて、イエスの聲はカイザリヤ、ピリポの昔の如く、特に著き意義を帯びて吾人の耳朶を打つが如し。

彼は諸君の改造説と諸君の論述との中に立ちて、問題は此に在り、汝は余を誰とかする、余に對する汝の態度如何、批評等も此の疑問を放擲し難く、教會も此發言を埋没す可からず、汝にして若し基督教を發見せんと欲せば宜しく、余——余の余たる所、余か汝の心意、情緒、良心に對して有する意義——に於て之を求めよ、と吾人に告ぐるか如し。

此の指導は服膺せらるべき幾多の理由を有す、是れ最上の權威より來れる指導にして、余はイエスの他、誰もイエスの基督教を改造せん

と發言するものあるを想像せされはあり。イエスの指導は甚だ直接に吾人に訴へ、且つ知識上道徳上の興味に滿つ。かく教師たるイエスの宗教問題の改述は不可識論者にも答へ易からしめ、誤解と混乱とに陥らざる透徹なる研究者にも亦齊しく答へ易からしむ。研究者は少くも自己の基本を知り、且つ此に研究を開始し得へし彼未だ基督教の何たるを知らざるものとあるも、基督教の在る處を知り、少くも何處に其源泉あるやを知り得へし。彼は其身邊に幾種の基督教あるに満足せず、之に當惑し、又恐くは之に反動せる裡より靜に基督教の發へ立つ「山」にむかひて其目をあぐるを得べし。而して基督教は哲學の學派にもあらず、神學若くは倫理學にもあらず、教會組織にもあらず、社會的若くは政治的意見にもあらず、一大現象——イエスキリストの人格の事實——を吾人の面前に聳立せしむるものなるを發見すべし。疑もあらず、此に基督教の根本的基本存す、基督教の構造はよし

如何なるとも、地盤は確に爰に在り。

凡そ何の研究たるを問はず、最初に決定すべきは其基本に在り、而してイエスに従へば、基督教の基本は彼自身の事實中に尋ねべきや、明なり、吾人にして彼の研究法に従はんと欲せば、必ずや此事實より發足せざる可からず。神學的思想若くは倫理學的教訓よりせずして、キリストの事實より吾人の研究を始め、其事實は何あるや、又如何なる意義を含蓄するや、宜しく之を驗證せざる可からず。是れ實に正確明瞭に且つ單純に基督教を學ぶの途にして、亦齊しく一般宗教上の問題を討究する方法と謂ふべし。基督教の基本は實にキリストの事實に在るなり。

斯く言へば、議論に於ては既に満足なるか如しと雖も、吾人の心に多少の反想の起るありて、其宗教的價値を失ふの恐れなきにあらず。基督教の基本はキリストの事實に在りと稱するも、其事實たるや一千

九百年前の事實に非ずや。面のあたりに彼に接したる人々には、イエスは或は既に既示されたる如くに己を提供して、直接に彼等に對して宗教的意義を有する者と爲りたらんも、如何にして今日の吾人に對し同一の意義を有するに至るべきや。縱令驚歎すべきも、過去の世紀の肖像中に吾人に對する如何なる宗教的價值在りて存するを得るや。宗教の要求する所は現在活ける心靈の眞理なり。かゝる心靈の眞理はイエスの教訓中には在るなるべし。故に又宗教の基本たるを得べし。雖もイエス自身の事實中に此の眞理ありと主張するは果して眞正に宗教的たるを得るや。歴史、神學若くは倫理學の思想と相異なる宗教なるものが如何にしてイエスの事實に其基本を發見し得べきや。今日の吾人にして爰に宗教の基礎を置き能はざるは——

最初の弟子等然かするを得たりしに拘はす——到底避け難き不幸歟非らずや。キリストの事實を研究せば歴史的及び其他之に類す

る結論に達し得べきも、如何にして宗教其物に達し得べきや。宗教の基本は唯人の靈魂中に現在して活ける心靈的生命の永遠なる眞理ならざる可からずと。

斯く提起せられたる疑問——基督教の内容は歴史に由らず、哲學に由りて開發せらるべきとせば、屢ヘゲルに依りて主張せられたる思想中に、其最も權威ある表明を發見すれども——は吾人今此に之を辨論すること能はず、又辨論するの要を見ず、吾人が現に論述せんと欲するもの、確實に唯の左の點に止まる。曰く過去歴史の事實たるキリストの事實は、之を研究する心意、情緒、良心に對つて、果して宗教の眞正なる基本を含有することを拒むものありや否や。先づ之を驗証せしめよ、吾人をして豫め之か判定を下すこと勿らしめよ、吾人は既に原本的基地を知る。其果して今日も猶ほ有効あるや否や、吾人先づ自己之を試験す可し。基督教の源本的基地はキリストの事實なり。然

らは此のキリストの事實は何そや、  
或る人々は此の問題も亦哲學的臆斷と黨派的偏見とに陥れるが故  
に價值なき者と云ふならん。今や論争の濃霧は深くガリヤの山々  
を鎖せり。然れとも吾人をして此等の困難に由りて容易く沮喪する  
ことならしめよ。素樸なる理解力と誠實なる意思とか猶ほ此大なる  
事實に就て發見し得へきものあるを信じて失望することなからし  
めよ。吾人は少くも此事實を試験せざる可からず。知識界の泰斗は(ベ  
ーコン)曰く「何事をか知り得へきや否やに關する疑問は、之を辨論す  
るよりは之を驗證することに由りて決せらるべきあり」と旨ある哉。

### 第二章 基督の事實とは何りや

イエス、キリストは問ふまでもなく、嘗て生活したる最大最偉の人物  
なり。凡そ人物の偉大は二個の標準を以て決定せらる。第一、人類に及  
ぼせる感化の廣大なること、第二、品性の純潔と威嚴あること——如  
何とあれは善良ならざる者は決して偉大なるを得されはなり——  
是れなり。此二者を以てする時は、イエスは實に鷄群の孤鶴にして、彼  
は最大の感化力を有すると共に、亦人中の最善なるものなり。  
吾人か今イエスの自身の事實に關して論述せんと欲するものは、以  
上二個の標準中前者よりは寧ろ後者にして、彼か爲せし事業よりも  
彼の品性に關するものあり。彼か人類の生活と歴史とに及せる比類  
なき印象に關しては、余は單に「ソッキ」氏の「歐洲道德史」中有力なる  
一節を引用するを以て満足すべし。曰く「イエスの活動せる三年間の

短生涯は、世界人類を更生せしめしむると、受けしむるとに於て、哲學者の議論若くは道徳家の訓言よりも遙に大なるものあり」と。若し此の言にして偽なからしめば——然り誰が復之を疑はん——其實際生活に及せる歴史的偉大に於ても、羅馬の歴史家(タシタス)と希臘の諷刺家(ルシアン)とが唯一句を以て叙じ去り、冷笑じ去りたるに拘はらず、此人の超然一頓地を抽出するあるを見るべし。

之と齊しく、彼は道徳的品性に於て卓出せる人物なりき、此點に於ても、彼が歴史上他の聖人英傑と比較して道徳的に超越せる處を擧示するは、甚だ容易の業なりとす。加之、此は唯イエスの品性に關する、真理の一部分を言明せるものに過ぎずして、吾人をして真理の全部を言はしめば、彼は單に他の人傑よりも罪少く徳高きに止まらず、彼の卓出は實に比較以上に在る絶對的なるものなり。イエスは實に汚點なき人物、一個の無罪なる人間なるなり。

抑も消極的の判定を爲すことは常に困難にして、絶對的に之を判定せんことは屢不可能の事に屬す。人の生活と品性とか全く汚點なきや否やを指點するは、到底言ふべくして爲し難き事なり。然れどもイエスの場合は全く之に反し、其證據は判定せらるべきもの、性質の範圍内に於ては、頗る強固あるものなり。彼の仇敵は實に之を見證人にして、憎惡と害心とを以てせる彼等の邪曲も未だ會て彼に對つて道徳上の批難を加ふる能はず、此人は罪ある人に接して共に食せり、この彼等の間諜心も、遂に用を爲さざりき。彼の朋友も亦之を見證人たり。彼等は彼を以て「罪を離れたる者となせり。彼等は正統なる猶太人にして、義せき者なし」人もあるとなしとの教を浸潤せるもの、然かも自家撞着を顧みず、彼等の聖書に反し、然り一人、彼は些の罪をも犯さざりきと言はざるを得ざりき。然り而して吾人も亦實にイエスの品性の全く汚點なきを證する見證人と謂ふ可し。如何に

なれば、イエスの朋友は漠然たる讃辭より以上のものを吾人に與ふるを以てなり、彼等は彼の生涯につき、短けれども亦詳論なる記事を留めたりき、彼等は漠然イエスの汚點あきを斷言することなく、事實を掲げて之を示せり、抑も此の如き揭示を爲し得るは、實際の生活を根據とせる外他に途なきものなり、吾人は其記事、凡の境遇、凡の場合に於て、即ち公と私とを問はず、成効の光輝と失敗の暗黒とに拘はらず、朋友の家と仇敵の面前とに關せず、生に於ても、死の最後の大なる試惑に於ても、イエスの爲し又言ひし所のものを發見し得へし、而して皆步履を誤りしとなく、又決して發言を誤りしことなく、一言にして之を謂へば、決して完全を欠きしとなき人物の詳細ある描寫なり、此の如き描寫は必ずや真正の肖像にして、其理想的繪畫たること能はざるは論なきのみ、かくて吾人の批評以上に在る者は、又齊しく吾人の想像以上に在るを知るへし、沈着にして且つ鋭敏なるシ

ヨハネ、ステニアルト、ミルは曰く福音書に示されたるキリストは歴史的に非ず、と言ひ或は其歎美すべき記事の幾分は弟子等の傳説に由りて附加せられたるやも知るべからずと言ふ如きは終に無用の論ありと。且つミルの進んで問へるか如く、誰か弟子等及び改宗者中、ミルは又誰か世界の詩人劇作家の中と問ふべかりき——イエスに歸せられたる言語を發明し、又福音書中に顯はれたる生活と品性とを想像するをを得たりしや、全然之を問ふの必要あるをとあし、夫れ美術的感興は麗はしきものなり、然れども美術的感興か第一世紀に於ける猶太人たる四人の記者をして、彼等の想像を用ひて一様に、此の如き完全ある人物の色彩と光影とを描かしむべきほと、前代未聞の高點に達したりと言ふか如きは、是れ全く無意義——故に亦不必要——の事あり、然かも彼等は之を爲せり、されは彼等か描き得たる唯一の理由は、想像よりせずして實際より之を描出せりと謂ふの外

なし。彼等は一個のモデル(模型)を有し、且つ忠實に之を描寫せるあり。而して描寫の完全なるは職としてモデルの完全なるに因り、又描寫の忠實なりしに因るなり。

されば、イエスが如何に承認せられしやに關する吾人の研究を始むる時、先づ彼の罪人にてあらざりきてふ斷言に於て、最初の著しき驚くべき解答に接す。彼は實に罪人にてあらざりき。而して是れ直ちにイエスが人類中最も賤き者の朋友たりしにも拘はらず、亦最も善なる者、最も偉大なる者と全く相異なる範圍内に在る不可思議なる孤獨を吾人に告ぐるものなり。人中に於けるイエスの眞位地を了解するの困難は、何人も彼と共に實際上比較すべき位置に立つると能はざるか爲にして、彼か人々の想像に與へたる印象は、他に誰も之を與へ得ざる程度のものにてあるなり。吾人は本能的に普通人物の群中に彼を置かず。孔子に始まりてゲーテに終る人物表中に彼の名を見

るときは、吾人は正統的信仰に反すと云ふよりも、寧ろ精神上の謹嚴を破るの感多きを免れず。イエスは確かに世界の人物群中の一人にあらず。試にアンキザントル大王、チャイレンス大帝、ナポレオン大帝等の名を挙げよ。普通の意義よりするも、イエスは到底此等の人物と比較すべくもあらず。彼は偉大に非らずして唯一なり。彼は單にイエスのみ。此の他何をも附加するると能はざるなり。

此のイエスの孤獨は二様に、或は寧ろ二箇の程度に、之を觀察するを得べし。第一、彼か道德的經驗を漏すの有様は全く他の人と相異れり。彼は然かく精密に人の心中に在る惡を指摘すと雖も、未だ曾て自己の罪惡を懺悔告白したることなし。彼は罪に沈める人に對つて切に友情を表はせしと雖も、未だ曾て己れ自身かゝる境遇に在る如く語りしとなし。彼は人類最上の良心と爲りし程、道德上の感覺鋭敏なりしと雖も、然れども尙自ら進んで彼の罪證を舉示すべく敵人に對



つて挑戦すると恐れさるべき。凡て此等は彼か管に罪人を離るゝのみならず、亦所謂聖徒とも頗る異なることあるを表示する特異點にあらずや。彼の聖徒等は新生活に入らんか爲には、皆熱涙と祈禱とを以て悔改の險阪を攀ち、而して後漸く其所謂聖境に達せしものあり。詩篇は實に之を證す。懺悔録と基督の模倣とは亦齊しく之を吾人に告ぐ心の深くして謙遜する人々も亦實に之を告白せざるはあし。然れもイエスは決して此の如き告白をなさざるなり。猶ほ此に止まらず、イエスの道德的孤獨に關する第二の點は、かゝる消極的のものにあらずして積極的なり。イエスは未だ曾て道德的不完全と道德的欠乏とを示せることなきのみならず、却て己を以て他人の欠乏の供給者なりと思惟せり。之れ既に前章に於て論述せし所にして、雖ありて之を拒み得るものあらざれば、更に詳細の説明を要せざるべし。縱令之を説明するも其説明たる左の最簡なる數言に及

はさること頗る遠きものあるべし。曰く、人若し渴かば我に來りて飲め、曰く、凡て疲れたるもの重を荷へるものは我に來れ、我れ爾等を息ませんと、是れ皆道德上の切迫を感せざるのみならず、却て此の如き切迫を幫助せんと欲する人の言語あり。他は皆迷へる羊なれとも、彼は迷へる羊ならざるのみならず、亦却て牧羊者たるあり。他は皆病める者なれとも、彼は健全あるのみならず、亦醫師たるなり。他の生活は皆奪はれたるものなれとも、彼の生活は自己の有たるのみならず、亦却て賠償たるなり。他は皆悉く罪人なれども、彼は罪人にあらざるのみならず、亦却て救主たるあり。此等は公平にして且つ熱心なる人々の深く感せざること能はざるものにして、人性の全体を通じて此の如きものあるを見ざるなり。且つ此等は正統神學の誇張的教義にもあらず、實に近世批評學の結論たるなり。近時、宗教學者間に於ける最も著しき特徴は、實に一千九百

年前に生活せしイエスに關する研究なりとす。基督教の盛なりし過去の世紀に於ては、イエスの個人的肖像見失はれ、其人間的容貌は神秘的信仰の雲に遮られ、若くは教義の覆被に掩はれたりき。羅馬教會に在りて、恍惚たる信仰者の渴仰を得たるものは、苦痛を帯べるイエスの美はしき顔色の幻影に過ぎずして、ガリラヤに在りし如き生活に至りては、殆ど當時の思想と生活とに燦然たる光輝を加ふるゝとなかりき。又プロテスタント教徒に對しては、彼は人の子と爲りしよりも寧ろ容易に或る要務を執行すへき職責的人格と變し去れり。此等の兩者より、今日の人々は新しき熱心を以て、皆に必しも宗教の名に於てのみあらず、歴史の名に於て「我等イエスに見えん」とを欲してふ。舊き要請に返り來れり。此要請は著るしき應答を得たり。過去半世紀の間、殆ど智識の各部分に大なる影響を及ぼせし歴史的研究の精神は、基督教の研究、殊にイエスの生活、品性及び人格の研究に勝り

て注目すへき影響を與へたるものあらざるへし、各種の見解を以て書かれたるイエスの傳記は夥しく出版せられ、批評的研究は此問題の各歴史的側面に其力を費し、彼の教訓、事業、經歷、人格等は空前の研鑽を經且つ評價せられたり。而して其結果は事々しく之を言ふの必要ありと雖も、嘗てパレンステナに生活せしイエスは、彼の時代より以後の他の時代よりは更に善く——詳言すれば更に明白に、更に批評的に知了せらるゝに至れり。而して此等の結果は如何ありしや。此等の結果はイエスの怪異なる神秘的孤獨は、到底認容すべきものに非らずてふるといふべし。されどイエスは猶ほ近世批評家の眼中に在りては、確然匹偶なき非凡の人格たるなり。余は其の實例としてカラムの大著述を擧ぐるを得へし。其中著者は常に自己の主題の全然超自然的なるの感を禁ずる能はずして、屢自然的豫想の制限外に逸出せんと欲するものあり。少くも他人に無きものイエスに在り、詳細

に周密に彼を知るに従つて、吾人は益此感を深くす。彼は吾人の分解以上在りて、人性普通の典範を破壊し、吾人の批評をして施すに所あからしむ。彼は吾人の精神に畏の念を抱かしむ。チャイルス、ラム曰く、若しセーキスピアにして此室内に入り來らば、我等は彼を迎ふる爲に席を離るへし。若し此人(イエス)なりしならば、我等は足下に伏して其裾に接吻すへし」と。此語は眞に嚴肅なる態度を取りてイエスの人格を研究せんと欲する學者の深奥なる感情に應ふるものなり。然れとも凡て以上説き來りたる末——更に詳細に之を論述するは容易の業なれとも、ろは必要のあとにあらされは——吾人は今決定せんと欲する疑問の眞實なる答を發見し得たりと思惟すへきや。イエスの品性は素より汚點なきものありしならん。其の人格は素より人性幾多の現象中不可思議なる孤獨にてありしならん。彼は素より一般の道徳的必要以上に在るのみならず、其の周邊の人々の欠乏を

供給し得たりしならん。然れども此等は皆長き歲月以前に在りしものにして、舊き疑問は猶ほ未だ解釋せられざるあり。此等は皆驚くべきものありと雖も、今日の吾人に取りて如何ある適切なる宗教的基本存在するや、宗教の基本は元來靈魂中に生きて現存するものならざるへからず。然るに是迄イエスに就て論述せる所は皆歴史的にして、直ちに之を以て宗教的と爲すこと能はず。キリストの事實とは歴史的事實なり。されは此事實が如何にして——前章に於て主張せられたる如く——個人的、心靈的宗教の基本を包含するものなるかは尙ほ擧示せられざる可からざるなり。

之に對する答を得んと欲せば、此等の歴史的印象を其結局まで追究せんか爲に猶ほ深くイエスに就て思考するに在るあり。吾人若しキリストの事實を能く熟思せば、其の事實は吾人の所決を迫るのみならず、其所決は又宗教的なるをも知るに至る可し。吾人は既に歴史

の冷める紙上に於てかゝる汚點なき人格を發見し得たり。而して吾人の眞心は之に由りて驚くへくも吾人を捕捉し、且つ未だ曾てあらざる有様を以て、吾人か道徳上如何ある種類の人格に屬するかを發見せしむ。吾人は歴史的福音——道徳的欠乏に在るものは凡て彼に聽き彼に來るへきイエスの昔の揚言——を讀み、之と共に益深く此要求に對つて最後の決定を爲すへき位地に立てること感せずんばあらず。是れ實に宗教にして、此の如き感動の起り來るは直ちに是れキリストの事實に由れるなり。果して然らば、斯く道徳的宗教的に變し去る所のイエスに關する吾人の思想は、抑も如何なる逕路を有するものなるや。請ふ少く之を論述すへし。

今や吾人の發見せる所は、此のキリストの事實にして若し眞心と意志とに於て公平に熟思せられなば、必ず大なる道徳的結果を内心に惹起することは是あり。吾人の義務を教へ、吾人の缺點を明かにするも

のは單にイエスの模範若くは教訓にはあらず。否、遙に此等より以上のものなり。且つ之に由りて吾人の道徳的生活及び品性に關する問題は惹起せらるゝなり。キリストの事實は單に歴史上の事實に止まらず、亦實に眞心の事實たるなり。キリストの事實は吾人の道徳的存在を捕へ、且つ之を整理し、之を詰責し、思想、感情、意志の根底に於て吾人の生活を吟味する權威ある檢閲者たり。而して不思議にも吾人は之を迴避するの力なく、且つ其の著しき權威を覺ふ。吾人の感情、意志、良心を開ひて、キリストの歴史的、事實が與ふる印象を公平に承認するに従つて、其印象内心に於て益道徳的結果を惹起するなり。吾人は最初智識的にイエスを驗證せんと欲せしも、今や彼は却て心靈的に吾人を驗證しつゝ、あるおとを發見す。彼我の位地此に至りて全く轉倒し、イエスに關する歴史的、智識的疑問未だ其終を告げざるに、更に一層緊要にして切迫せる直接の疑問は其間より起り來りて、吾人自

身に關する道德的問題とあれり。此は單純に福音書を讀む所の人々か認めて以て眞實ありとする所にして、實に特異なる現象と謂はざる可からず。吾人アリストートルを讀み、之に由りて智識的に得る所頗る多しと雖も、イエスを研究するに及んては、全く之に反して、最も深く心靈上の煩悶を起し、汝はキリストに就て如何に考るやてふ道德に左程の關係なき、淡泊なる歴史的疑問は、忽ち變して、余は彼に對して如何に爲さる可からざるやてふ、最も個人的にして又實際的なる道德上の疑問とあれり。且つ此疑問は益吾人の答を促して已まざるなり。

吾人は今や歴史的人物に對し、之を爲すは頗る奇異に見ゆる所の事を爲さる可からざるに至れり。吾人はイエスに對する關係に於て餘儀なく感情、意志等の或る道德的態度を取らざる可からざるに至れり。更に明白に之を言へば、吾人は今現にかゝる態度を取りつゝあ

り、而して到底之を避くるの途を有せざるあり。智識上に於ては、人或は不偏不黨の態度を取りてイエスを研究するを得へきも、道德上決して中立の態度を取るゑと能はず。イエスの言語、品性、人格が忽ち此の如き結果を吾人の内心に惹起するや、吾人は最早未だ曾て此事あらざりし時の如くなること能はず。且つ之を放擲せんと欲するも亦能はざるなり。然り而して一たび提起せられたる疑問は必ず之に答へざる可からず。縱令之を不問に附せんと欲するも、是れ既に其答たるあり。是れ余が、イエスの事實に對しては、吾人到底何れかの態度を取らざる可からずと謂ふ所以なり。イエスに伴ふ感動と權威とを歡迎し、熱思し、服従せんと欲するか、或は之を避け、之に抵抗せんと欲するか、此兩者中孰れを取り孰れを捨つるも、之を決するは吾人の避け難き問題とあれり。如何に假托するも吾人は自ら之に答へつゝあるを知る。而して其答は吾人の道德上の現状と將來に於ける重大なる

結果を來すものにして、實に善惡の間に横れる悠久なる戦の一方を味方として撰擇するの大事に臨めり。此に吾人か前に所謂戦あるものありて、最早敵味方の「相知らざる軍勢」の「雜然たる乱戦」にあらざり。此に近接したる眞實なる個人的大争闘ありて、吾人は必ず吾人の旗色を明にせざる可からず。吾人とイエスの逢着は避け難く遂に吾人を此に携へ來れり。吾人は素と研究の平靜を以て始めしか、忽ちにして道德的決意を爲すべき戦場に呼び出され、少くも吾人の或者は激しき戦闘の後にあらざれば容易く退敗せざる強敵と争はざる可からざるに至れり。吾人はイエスに關する疑問を以て始めたりしが、今や其疑問一變して、吾人自身に關する疑問となり、且つ其答は全く彼に對する吾人の態度の如何を表はすものとされり。

單に態度と言ふ、意義或は不明瞭なるを免れ難し。此に所謂態度とは何ぞや、蓋し最も實際上の事に屬す。故に既に模型に入れる宗教上の

習慣語を遠けて——必しも虚妄と認むるにはあらず、唯虚妄に陥り易きものあるか故に——實際生活の一二の見易き事實に相對せは此意義思ひしよりも遙に明かにあるへし。イエスの感化に導き至らんとし、或は之より誘ひ去らんとする實際生活、即ち思想及び行爲に於ける撰擇の方向は決して曖昧なるを得ず。吾人は彼に近きつゝある時を知り、又遠かりつゝある時を知る。各個人の生活には、事の大小を問はず、道德的撰擇を爲すの際、岐路ありて明かに其面前に横はるあるを見る。イエスの事實が眞面目ある道德的結果を生し、自ら良心の事實と爲るに當りて、人は故意に之に従ひ行くことを拒み、或は之に關して何事か起り來るとき、故らに、イエスの聲の更に明ある處、其感化の更に及ぶ處に導き至らざるか如き行路に進むことを得へし。此の如き人のためには、基督教の最要なる事實は單に外部に存する歴史上の事實たるに止まりて、些かも宗教の基本を其中に發見する

こと能はさるべし。然れとも人は亦他の方向を取ることを得へし。イエスの言語には人を招致するものあり、彼の心情には人を教誨するものありて、勇しく卒直に前者と異なる行路を擇み得るなり。而して誠實に且つ悪事に戀々たるか如き下た心を去つて、斯く爲すことを得は、キリストの事實は眞に宗教の事實となる可きなり。かくて基督教は其意義と實形とを有するに至る。最初歴史及び批評學のイエス、次に良心及び道德的感動と撰擇とのイエスタリシイエスは、今や心靈上の約束と平安とを與ふる内部的經驗のイエスとあり、イエスの名は特に最善の我、眞實の生命と同一たるに至れり。此の如くイエスは人の眞生命となり、パウロの所謂最早われ生けるに非ずキリスト我に在て生るなりてふ語は、是迄過實の言と思ひし者も、驚き且つ怪みて自ら其眞意義を發見せることを喜ぶなる可し。

是れ實に事實なり——此には唯此の事實を表示するに止め、後章に

於て更に詳細に之を討究する機會を有すへし。是れ實に心靈上の活ける眞理なり。決して死せる歴史にあらず。然かも又歴史、即ちキリストの歴史的事實より産出せるものなり。是れ決して抽象的思想若くは原理に溯るにあらずして實際的現象に溯るものあり。彼に就て思考する處とは常に歴史上の見解を吾人に與ふるのみならず、亦信仰の基本をも與ふるあり。此事實は歴史に始まり、發達して良心の事實とあり、遂に宗教的經驗に至りて終る。且つ此事實は宗教を建設し得べき事實にして、吾人は基督教の舊き地盤の今日も猶ほ有効あるを發見せすんはあらず。

以上論述せる所是れキリストの事實——歴史、良心、及び心靈的經驗の事實——なり。且つキリストの事實を論述するに當りて、吾人の最も注意すべきは完全に之を論述するに在り。若し一千九百年前バレンチナに於けるイエスの生活言行等に關して記述せんとせば、余が

記述は素より完全と謂ふを得ず。然どもイエスに關する事實は唯之に止まるに非ず。彼は實に古代歴史上の事實よりも更に多くの事實たるなり。彼は個人の經驗上現に活ける事實にして、初は歴史的現象あるも、此現象たるや、意識上の事實——内心の糾問、招致、約束及び更新——として、特異なる状態に於て再現する現象ありとするに非らざれば、讀者諸君は決してキリストに對して眞正の判断を下したるものに非ず。諸君は此二個の要素を承認するにあらざれば、事實上未だ彼の誰なるかを言ひ得たるものに非ず。此二要素中其一を欠けは決して之を完全ある記述と稱するを得ず。近世の一著者は曰く「心靈上のキリストと歴史上のキリストとの兩者中孰れか其一を排斥し去りて他の一を重大視したるときの結果は眞を失したる畫像に非らざるはあし」と宜なる哉。

されば若し吾人にしてキリストの事實の上に基督教を建設せんと

欲せば、決して顛倒したる描寫即ち此事實の偏見に従ふ可からず。此事實は二個の事實にして、基督教の依て以て樹立する所のものは齊しく歴史及び經驗の事實たるキリストなり。吾人は此の二個の光景を忘るへからず。若し古代に於て死去したる教師と其教訓とを論ずるの心を以て單に「歴史上のキリスト」を固執し、若くは「歴史上イエスの誰たるや」を意に介するゑなくして、唯「經驗上のキリスト」のみを論述する時は、吾人は廣く且つ確き基礎の上に基督教を建設するを得ず。基督教の基礎はキリストあり。彼れ若くは此れの上に建設すべし。二のキリストあるに非ず。唯一のキリストありて、外部の歴史と内部の經驗とに彼を發見せらるゝのみ。されば吾人の基督教は必ずや完全なるキリストの事實の上に建設せられざる可からず。教授デニール曰く「基督教は唯キリストの誰たりしやのみに非らず、亦誰たるやに關するものあり」と。換言すれば、基督教は歴史上の事實にして



兼て又經驗上の事實たるキリストに關するものなり。此に至りて吾人の研究は進むに従つて益明瞭にあり來れるを見る吾人は始め——今簡單に之を叙述せしめよ、是れ既に屢立論せるものなればあり——本來の基督教は神學的若くは倫理學的思想にあらずして、イエス自身の人格に基くべきを豫期して研究せしが、研究するに従つて愈其果して然るを發見せり、更に進んで、吾人の基督教は此基地の上に建設し得らるべきや否やを驗せしが、又果して其建設し得らるべきとを確めたり、如何とあれば此の事實は一千九百年前に於ける歴史上の出來事なるに拘はす、亦今日に於ける良心と道德的生活及び經驗との事實にして、吾人に取りては現在活ける真理即ち宗教の本源たるを得ればなり、吾人は斯くして權威ある基地を得たるのみならず、亦此基地の上に基督教を建設し得べきとをも發見せり、されば吾人は今より進んで此建設に従事すべきあり、詳言す

れは吾人は此事實中宗教に關して何事の包含せらるべきや、之を驗し之を排列し、且つ之を明白ならしむべきあり、吾人は今やキリストの事實の意義に研究の歩を進めんとするものあり。今此研究を始むるに當り、一事の明白にせざるべからざるものあり而して之を承認するも否とは、吾人の研究の全体の成効に關係する所少からざるなり。吾人は完全なるキリストの事實を研究論述せざるべからざること及び此事實は外部の歴史と内部の經驗とに於ける事實なることは既に之を言へり、されば此の如き事實の研究は合理的智識以上のものあらざるべからざるは明なり、合理的研究は其一側面たる歴史的事實を討究するものにして、博識なる學者の助を得たる凡の智識は勿論之を歓迎せざるべからず、然れとも此の如くに研究せられたるものはキリストの事實の全体にあらず、又基督教の完全なる基本に

あらず、此事實は良心の事實にして、此基本は亦道德上の糺問、撰擇、約束、及び經驗をも含むものなり。若しキリストの事實にして一側面より他の歴史的問題と同じく智識上の僻見を棄却すへきまを稱道すると共に此事實は亦他の側面より正しき良心と正しき意志とを要求するものなり。されば二個の光景を有する此事實の性質上、遺憾なく真正ある基督教研究を爲さんと欲する諸君は宜しく批評的智識——如何となればイエスは歴史上の事實あれば——と共に、又批評的智識以上のもの——道德的印象と命令とに服従せんとする良心と意志如何とあればイエスは亦内部の道德的經驗の事實なれば——を以て之か討究に従事せざる可からず。若し諸君にして基督教の何たるやを知らんと欲せば、此二個の側面に於て虚心坦懐あるを要す。若しキリストの事實に關する諸君の推究にして或る歴史上の要點を示す時は、諸君は之に對して公平なる心を有せざる可からず。是れ

各人の許容する所あり。然れども、若し諸君の推究にして或る道德的撰擇と招致と——歴史上の事實なると共に又良心の事實なれば、必ず此の如くならざる可からず——の面前に諸君を導き至る時は、諸君は前と同じく之を承認するに公平なる意志を以てせざる可からず。此の如きは内外二個の光景を有する問題の性質上既に明白なりと謂ふ可し。されば吾人をして先づ此事實を明かに理解するを得せしめよ。吾人にして若し道德的に之を迴避し或は不正直なる意志を蓄ふるあらば、吾人は決して基督教の何たるやを悟り難きを明かに理解せしめよ。且つキリストの事實即ち基督教の基本を有するキリストの事實は歴史上の事實にして併せて又良心の事實なるか故に以上と言へる事の必然ある道理なるをも共に理解せしめよ。此くして吾人は道德上併に智識上公平に此事實に對せざる可からず。吾人に歴史の事實に虚心あるのみならず、道德的結果を生ずる誠實なる意

志を以てせざる可からず、然らざれば吾人の辨論は其發程に於て既に失敗に歸すへきは見易きの道理ならずや。此等の事を主張するにも吾人は猶ほ宗教の大教師たる者の方法に従ふものあり。如何とあればイエスが此教を知り得へしとの約束を與へしものは、卓出したる智識を有し、且つ歴史に該博なる人々よりも、特に彼の旨に従ふものなればなり。

### 第三章 キリストの事實の最初の意義

夫れキリストの意義は深く且つ大なり。此の如き世界の歴史と個人的經驗との樞軸たる事實は、確かにアリストートルか所謂拙作ある戯曲の波一瀾ならざるや明けし。人間の歴史にして意義ありとせば又心靈的經驗にして意義を有すとせば、キリストの事實は必ず意義なる可からず、而して此の如く大なる事實は亦大なる意義を有せざる可からざるは勿論の事にして、最後に至りて、充分に説明し難く又言ひ顯すこと能はざるものあるを發見するに至るも、亦必しも驚くを要せざるなり。

蓋しキリストの事實の意義に關する疑問は漸々發展するものにして、其答の端緒を開くは左程の困難あるに非ず。キリストは少くも直接にして且つ平易單純ある意義を有す。余にして若し其最初の意義

は道德的生活と品性とに關するものなりと言はし、是れ恐くは多數者の心中を表明し得たるものと信して不可あかるへし。

(附註)——キリストの事實が人心に接し、且つ意義深くあるの途は、勿

論種々相異れり。人によりては此に最後ありとする意義も、屢最初にして直接ある意義となることあり。然れとも、之を論述するに何れかの順序を撰はざる可からず。而して余が此に用ひたるものは一般普通には自然にして論理的なるか如し。且つ個人的經驗の之に伴はざる人々にも理解し易さか如し。

此は單にキリストの事實を述へし時既に明かありしものなり。吾人は既に歴史的にイエスの理想的にして高潔、汚點なきことを發見し又良心の内部に於て、個人的にして壓迫する道德的權威たることを發見せり。キリストの事實に對して其心意と良心とを鎖さざる人は誰も己れの一層善人たるへき責任を感じ、亦己れとキリストとの關係

永續する間は益自己の品性の發達すへきを感せずんはあらず。而して皆未だ曾て有らざる有様に於て、自己の欠點を教へられ、自己の義務を明にせらるゝなり。キリストの事實が他に如何なる意義を有するとも、未だ以上の意義を有せざることあらず。而して他の意義に對する熱心を名として此意義を没せんと試むるは明に假托たるを免れ難し。キリストは確かに下の如き意義を有す、即ち諸君は新しき標準を以て自己生活と行爲とを再開し、諸君の行爲及び生活の理想を自己の面前に置き、且つ之を實現せんと欲するものなり。此意義にして感ぜらるゝことあくは、それは寧ろ其人はキリストの事實に相對せず、又對するを好まざるものと謂ふ可きなり。歴史に於けるイエスの模範と、經驗に於けるイエスの權威とは等しく以上の意義あることを示す。かくて吾人の品性に關する問題は直にキリストの意義の一部分として基督教中に起り來るなり。されば基督教は他に

如何なる意義を有するにせよ、新しき品性を吾人に提言し、且つ之を達しるの途を吾人に教ふるものなり之なくは他は用なきのみ吾人は今此二件に關して少しく考究せざる可からず。

然れども之を考究するに當り、此要素がイエスの宗教に於て如何に顯著にして且つ有力あるかは誰も能く之を觀察するを得へし。宗教なるものは素より人の品性に關するものなること明かなれども、新しき基督教福音の進入したる羅馬の天下は大に之と相反したるものなりき。羅馬帝國の文明——或點に於て今日の文明よりも進歩したると稱せらるゝ文明——に於ては、宗教は全然道德と分離したるものなりき。希臘及び羅馬の祭司巫術者は人を清潔なる生活に導くを以て、己れの義務の一部なりとは瞬時も氣付かさりき。當時公私の生活は、無情極まる殘酷なる所業と、殆ど想ひ至り難き放縱なる惡徳に沈淪したりしも、宗教は敢て之に抗言することなきのみならず、反

つて其所謂巫術は最も穢れたる不義不正を保庇し、祭司等は之を批准したりき。當時の哲學者にして又道德家たる人々が基督教の興起に些の注意を與へざりしは最も不思議なる事實なれども、*レツキ*氏の指摘せるが如く、宗教と道德との全き分離を以て之を説明するを得べし。基督教か神學を離れて單に倫理上の一組織としても、眞面目なる人々の注意を惹きしならんとは雖しも推測する所なれども、道德上の事柄に最も熱心ありし哲學者等は、是れ宗教ならずや、道德的生活に關して宗教果して何を爲さんとするやと言はん許りに、*プラターク*を始め、*セチカ*、*エビクテタス*、*マールカス*、*オウレリウス*の如き人々は無雜作に論し去りて、歴史上最も卓絶せる道德的現象の眼前に現出したるを悟らず、唯僅に一瞥を與へしのみ。此等の人々は如何にして基督教か宗教の範圍及び目的に關して自己の豫想を毀つものなるを知り得んや、又如何にして基督教が道德と最も密接に結合

し、特に世人に對して新しき道德的品性を意義するものなるを知り得んや、若し此の如き思想にして少しにても此等の人々の心中に起りしならば、セチカの如き其書中に基督教と殆ど同一の教説を有しながら、一語の基督教に及ばざるの理なし。又歴史はマーカス、オウレリアスの如き人にして猶ほイエスキリストの徒弟を迫害するが如き「最も悲劇的事實を記述することを免れたりしあるべし。然れども今姑く之を措き、基督教が世界に齎らせる新しき品性は果して如何なるものあるやを研究すべし。

### 第一 基督教的品性

基督教的品性の規範は勿論イエス自身の品性あり。彼が活ける律法なることは、實に古の辨證家の言へる如し。故に吾人は第一着歩に於てキリストの品性の特異點に就て正確なる印象を有せざるべからず。余は今此に特異點と謂へり。それは勿論キリストには必ずしも基督教的

らざる。——例へば勇氣、眞實、忠信の如き——性質ありと雖も、此等は今此に論ずるの必要なしと信ずればなり。今吾人の目的とする所は、イエスが世に示せし品性の各側面を辨論せんと欲するに非ず、唯吾人が呼んで特に基督教的なりとするものを認識せんと欲するに在り。吾人が觀察を下さんと希ふものは唯此のみ。

余はイエスの品性に四個の特異ある要素ありと思惟す。

其第一は純潔即ち神聖是れなり。余は之を特異點と稱す。如何となればイエスは既に言へる如く、全く汚點なき人たるのみならず、彼に對して制限なく此等の語を使用し得へき唯一の人なればなり。基督教以外の道德教師及び道德的俊傑の中、人々の崇敬を受け、又卓出したる德行あるもの多かれども、其人に對して、不純潔なりとの思想を抱くは實に蛇蝎視すべく、些少なる惡の兆候ありと想像するさへ畏縮するに堪へたりと思ふ程の人はあらず。嚴然として惡徳を排斥する

に止まらず、否、全く火の燬き盡すか如くに之を滅却せんとする所の  
 情感を道徳に注入せしは、實にイエス其人なりとす。眩耀すべき光輝  
 を道徳性に與へ遂には之を白熱に至らしめるものは實にイエスな  
 り。然り而して吾人か純潔と呼ぶ所の徳義即ち罪惡の兆候に對する  
 熱切斬新にして且つ鋭敏ある感念は彼に由りて始めて人の品性  
 の理想中に入り來れり。彼は徳義を以て全く新しきもの——人心に  
 於ける内部的革新の情感たる——と爲せり。彼は「神よ我が内心を潔  
 め給へ」と祈ることを人に教へたり。之を譬ふれば、山間の泉水、枯枝朽  
 葉の如き汚物既に悉く沈澱し去りて、清冷透徹、底に到るまで唯天の  
 麗光を反映するあるか如し。誰が此の如き徳義の思想を罪に汚れた  
 る人心に暗示したりしや。且つ誰か之を實現すべき路程を指示する  
 もの乎。心の清き者は福ある哉。神を見ることを得へければなりとは  
 實に彼自身の經驗より言ひ出だせるものなり。

イエスの品性の(第二)の特異點は愛なり。之れも亦純粹なる基督教的  
 意義に於てイエスの創始に係る。眞に愛の何物たるか。又人間生活に  
 於て其有すべきの位地如何あるかを悟るに至りたるは、イエスの世  
 に來りしよりの事にして、其以前に於ては未だ曾て之を理解せるもの  
 あらざりき。是れ決してイエスを離れたる人性か全く愛の觀念を有  
 せざりしと謂ふにはあらず。然れどもイエスは之を擴張し、之を強め  
 且つ之を高めて、實際上新創の意義を有するに至らしめたり。其迄は  
 愛に制限ありて、プラトンの如き世に崇敬せらるゝ教師すら外國人  
 に對する「自然の嫌惡心」を賞讃せり。外國人てふ名は、希臘人には野蠻  
 人に等しく、羅馬人には仇敵に同しかりき。若し古代の人々にして愛  
 を知らざりしとすれば、其範圍の普遍なるを知らざりしなり。イエス  
 は愛の人類のものなることを吾人に示せり。是れ未だ「ポルチ」前  
 廊の義、ストイック派の哲學を云ふ。或は「アカデミー」(國名、プラト

派の哲學を指すに於て思想せられざりしものなり。且つ彼は愛の觀念を擴張せしのみならず、亦其意義を強めたり。ストアック派の哲學者は往々同胞主義の觀念に到達せりと稱せらる。然り、然りと雖も、イエスの有せし同胞の愛はストアック學者の夢想せざりし所なりき。前者の人と人との關係に就ての見解は、如何に善くも、熱からず冷からざる論理に過ぎずして、彼等縱令慈心に富みしとするも——其實甚だ遠し——其人道あるものは極めて恬淡にして且つ抑制したるものなり。されどイエスの人を愛するや、熱氣ありて衷情よりし、其活動は胸中の血を躍らせつゝあるあり。彼か人を愛するや纏綿として忘るゝ能はず、之か爲に祈り、之か爲に勞し、終に之か爲に死せり。是れ實に新しき愛にして、クリスマス日の寒風の裡に仲夏の日光の温熱の如くに地上に降り來れるものあり。而して其温熱は爾後未だ曾て人の胸中を去りしことなし。且又愛を普遍的に且つ切實

ならしめたるイエスは、亦之を以て生活の最上律と爲せり。犠牲献身の高貴なる行爲は多く歴史上に散見する所なれとも、彼は愛を以て律法、即ち凡ての生法の準據すべき原則と爲せり。愛するは彼の生命にして、愛の外生命てふ生命は彼の有せざる所なりき。彼は即ち愛にてありき。凡て以上の如き有様に於てイエスは愛の觀念を更新し、眞に創始的に之を擴張し、之を強め、且之を高めたりき。天下未だ此種の愛を見ざるあり。凡の人に對して凡の事を爲し、且つ生活の最上律と認識せらるゝ此種の愛にして人の品性の理想中に其位地を占むるに至れりとせば、是れ實に世界に於ける愛の名を再創せしイエスに溢觴せりと謂ふ可し。

附註——「愛てふ語は、今日は最も高尚なる意義を有すれども、古代文學上の用法は大に趣を異にせり故に。第四世紀に於てゼロームがボルゲート(拉丁譯聖書)を譯する際、基督教的愛を表明するに「ア



モル(愛)てふ普通語を用ゆること能はずして「カリタス」てふ普通  
 に用ひられざる語に依頼するの止むを得ざるに至れり。是より  
 して英譯欽定聖書中の「ケヤリチ」(愛)てふ語は出て來れるなり。  
 イエスの品性の(第三)の特異點は宥恕なり。此は素より前項の愛より  
 出て來れるものなれども、亦別に舉示すべきものなり。何となれば此  
 れイエスカ道徳上に施せし最大なる革新に非すと雖も、恐くは亦最  
 も特異ある革新なればなり。キリスト以前に在りては、宥恕に關する  
 一般の感情は、羅馬のカムパス、マロシヤス(公園に似たる處の名)に於  
 ける都督官スラの爲に建てられたる有名の碑銘なりとて、ブルター  
 クが吾人に傳ふる所を見て知るを得へし。曰く「明友の手に爲せしと  
 善事も仇敵の手に加へたる害ともには予は利息を付して報ひざるはあ  
 かりき」と。宥恕は觀念としては古代の人に知られさりしにあらず。然  
 れとも實際は誰も之を實行し得たるものなし。之を實行して効果あ

らしめたるものは獨りイエスありと謂ふべし。彼は決して憤怒の情  
 を蓄へず、人の惡を思はず、和解し難き深仇の念なく、又瞬間も復讐の  
 心を懷きしことなし。加之彼は何よりも最も羅馬の百夫長を驚かし  
 て遂に禮拜させるを得ざらしめたる「父よ彼等を宥し給へ、其爲す所  
 を知らざればありてふ十字架上の祈の精神を以て、日々行動したり  
 しなり。是れ何等の革新ぞや。此宥恕の律法に關して「エクセ、ホモ」の著  
 者は曰く「是れ基督教道徳の全体、少くも根本として一般に考へらる  
 るに至りし程、大ある感化を人心に與へたり」と。又曰く「基督教的精神  
 に關して語る時は、何時も其の宥恕の精神を指して語るものなるを  
 注意す可し」と

然れども、此に猶ほイエスの道徳的品性に關する(第四)の點ありて、他  
 と等しく斬新にして且つ特異なるものなり。謙遜即ち是なり。此品性  
 の特に基督教的あることは、事々しく之を謂ふの必要なし。異教國に

於ては謙遜に似たる徳は皆悉く輕蔑せられ、且つ最善なる倫理學派の徳義は自尊を以て其基礎となせり。イエスの謙遜は前に舉示したる他の品性と共に相列せしむるほどに必要な特色殆どあることあしと思はるれども、然れども、かく思ふは是れ此品性がイエスの生活中如何ある位地を占むるやを理解せざるものあり。勿論謙遜の徳たる自覺的のものにあらず、其の能く謙遜たるが故に常に半ば人目より遮られたる「美花」の如し、而して此點に於て謙遜は常に自卑と區別せらるべきものなり。自卑は中世紀の宗教が屢謙遜と同一視せんとする傾向ありしものにして、露骨と虚飾とに流れ易く又屢流るゝものあり。謙遜は之を發見せんとせば、恰もアルプス山上の「アイナルバイス」植物の名の如くに之を探さざる可からず、然れどもイエスに於ける如く完全あるものを見出すは實に美の極と謂ふ可し。イエスの謙遜は管に野卑なる虚榮心と齷齪たる自己心とを離脱せるのみならず、又管

に賞讃に耳を傾けず、聲望の主人公たる地位を羨まざるに止まらず。否、遙に是れ以上のものなりき。若し萬世の師たるべき人ありとせば實に彼ありき、然れども彼の世に在るや僕人の如くなりき。若し天與の大教師ありとせば實に彼なりき、然れども彼はサマリヤの婦と共に費やせし午後の時間を空費せりとは思はざりき、且つ殆ど貧しき者無學なる者若くは世に度外視せらるる者と共に送りし彼の生涯を以て徒勞の生涯とは感ぜざりき。歴史上最高の人物たりし彼は税吏罪人の友として最も善く且つ最も適當に記載せらるゝなり。此の如きは實にイエスの謙遜にして、之を是れ眞の偉大の顯現と稱す可きなり。シーザル若くはナポレオンの傲然たる主我主義は時として人心を動かすものなきにあらずと雖も、彼等は殆ど他人は皆土塊に過ぎず、唯凱旋の行列を賑はす爲に造られたるものにして、己れ獨り別種の人間なるが如く考ふるの權利を有すと思惟するが如し、然れども

吾人はイエスが同胞以上の位地を占め、且つ彼等に及ぼす自己の勢力を知るゑとは、此等世界征服者の到底企及する所にあらざ。イエス曰く「爾曹われを師と呼び、また主と呼ぶなんぢらの言ふところは宜し、我は誠に是あり」と。此語は、驕傲なる「世界を狭しとする巨人の大闊歩」よりも遙かに吾人を動かすものありて、彼等に對するよりも數層深き敬畏の念を起さしむ。イエスは勢力を有したりしと雖も、謙遜なる服事の精神を以て之を清め、世界の主人たりしと雖も、謙りて賤劣ある徒輩の間に住し、主たりしと雖も人に事へたりき。此くの如く彼は人間生活の新しき眞の偉大を吾人に教へたり。謙遜は彼の生涯に於ける至大なる道德的勝利にして、宥恕と共に亦最も創始的なるものなり。恐くは今日も猶ほ人々の心中に在りて、人の品性に及ぼせし新しき感化を擧示せば「柔和にして心謙れる」彼に學べる精神と、彼の謙遜なる「心を以て心と爲したる精神より他にあらざるべし。如何と

されば、基督教的品性の特徴たる此徳を好まざして、之を批難する輩は未だ基督教を信ぜざる一般人中に多く見るゑとを得ればなり。聖オウガスチン言へるあり。曰く「基督教的訓練の殆ど總ての實質は謙遜なり」と。

純潔、愛、宥恕、謙遜、此等はイエスの品性の四個の特異點あり。或は歴史的に、イエスの生活と教訓との記録よりするも、或は内部的に、彼が惹起せる道德的結果よりするも、此等の特異點を眼前に置かずしては、誰もイエスの事實に對して何事をも爲し能はざるべし。基督教の有する所にして他に如何なるものあるも、眞に基督信者と爲ることは純潔なる心を有し、愛と宥恕の精神に富み、且つ謙遜なる人と爲るゑとに外ならず。イエスの生活と品性と關する此の道德的意義は吾人之を拒み、又之を避くること能はざるなり。

然れども、到底之を拒み、之を避くるゑと能はずんば、吾人は如何にし

て此の如き品性に達すべきや。口に純潔を説くは頗る容易なれども余は如何にして誠實に我心を潔くし得べきや。愛に就て述ぶるは愉快なれども、全く利己の念を断つは殆ど爲し難き業なり。聲高らかに宥恕を論ずるは見事なり。されど侮辱を受け損害を蒙りし時、容易く之を忘るは人の性にあらざ。謙遜たらんと冀ふは難きあとに非らず。されど眞に謙遜あるは甚だ難し。かく此等の事實を觀察し、之を経験するに至らば、其容易に吾人の内心に起り來らず、且つ理想としても吾人之を欽慕するあとを好むと雖も、正確に之を實行するに至りて殆ど之に堪えざることを發見すべし。吾人は恰も生活の平野に在りて、純潔、愛、宥恕、謙遜の高峯を仰ぎ語るに過ぎず。一たび其巔に攀ぢ登らんとして歩を進むるに當てや、人の性は遲鈍して氣力あきのみならず、亦屢之に反抗するものありて存するを見る、眞に善く自己を知るものは誰も之を否定すること能はざるべし。

されど此等の高峯は實に多くの人々の跋渉したる所にして、基督教の各世紀を一閱せば、イエスは嘗に此種の品性を世に示せしのみならず、人性に存する實際の反抗を却けて、特に著く實行し得らるべきものとあせり。人々は此等の品性の何たるやをイエスに學び、又能く其の自己の品性と爲し得ることをも學びたり。基督教的品性——純潔、愛、宥恕、謙遜——は言ひ消し難きまでに人々の生活に實現せられたり。余は想ふ、吾人の多くは、何物も能く塗抹し得ざる基督教的品性の存在と其美との印象を、神聖なる遺物として之を残し去りし人々の生活に於て見ることを得たるあらん。此等の基督教的品性は自然の發展にあらずして、別に一個の事實たるなり。されば此事實は或る解釋を要するものにして、人々をして純潔に、愛と宥恕に富み、且つ謙遜あらしめしものは抑も何物や。余を此の如く爲すものは果して何物なるや。基督教的品性の理想は未だ之を説

明するに足らず之を人性に實現せしむる道德的勢力は果して處り來るや吾人は又之をキリストの事實中に發見し得べきや否。

### 第二 道德の原動力

多くの人々より敬愛せられたる故ヘンリー・ドラモンド——其品性は余が上に言へる、基督教的品性の能く人性に於て達し得らるゝことを世に示すに足る著明の實例あり——は「變化せる生活」を題する自著の小冊子の冒頭に於て、ハックスレーの「若し此に強大ある力ありて朝々巻き上げらるゝ時計の如き状態に於て、余をして常に真理を思ひ、正義を行はしめんとするが如きことあらば、余は直ちに其提言に抵抗せざる可からず」との有名なる語を引用し、且つ曰く「余は今此提言を爲さんと欲す、實に時計の如く爲るゝとあくして此目的を達し得らるべし」是れ實に大膽ある答ありキリストの事實は能此くの言を辨證し得るものありや否や。

此疑問に答ふるに當り、深く注意して避くべきものは虚妄と過實とに陥るゝととなり、歴史的事實に就て語るときは、容易に此過失を指摘し得べしと雖も、内部の道德的勢力の如き問題に就ては、是れ甚だ陥り易き過失なりとす、何の教訓に於ても、其中に良心の存するは勿論にして、經驗上の事に於て殊に然りと爲す。而して此の如き問題に於て無責任なる言辭を用ひ、若くは事實の根據を有せざる斷言を爲すが如きは、良心を辱かしむるの大あるを知る可し。

吾人が問ふべき最初の疑問は、吾人が品性と稱するものに顯はるゝ如何ある原動力ありや即ち是あり。此疑問に對する吾人の答へは明白に且つ單純にして、吾人の撰擇若くは吾人の意志此なりと答ふることを得べし、或は又吾人を感動せしむる模範若くは嚴肅なる命令の力ありと答ふるを得べし。此の如き答は普通の品性を思考する時には或は充分ありと雖も、最も高く最も深き品性の本源を

尋ねるに當ては稍不充分ありと謂ふ可し。されば此等は基督教的品性の原動力果して何れの處に存在するやを問ふに際しても亦齊しく充分なるを得ず。此等は純潔、愛、宥恕、謙遜を産出する充分なる原動力にあらざり。撰擇と意志とも亦充分なる原動力にあらざり。如何となれば、吾人屢々わが願ふ所の善は之を行はず。反て願はざる所の惡は之を行ふとは、使徒と共に之を承認せざる可からず。模範も亦充分なる原動力にあらざり。如何となれば、羅馬の詩人と共に吾人は屢余は善を認め且つ之を喜ぶ、されど反て惡しきに従ふとを承認せざるを得ず。若し夫れ基督教の理想とする道德上の卓絶に達せむる爲に單なる命令の效果なきは素より明白なりとす。されば吾人が今尋ねる所の原動力は此等よりは以外に求めざる可からず。

然らば何處に之を求むべきか。若し撰擇、意志、模範、若くは命令が最高最深の品性に達せしむるに不充分なりとせば、故に又基督教的

品性に達せしむるにも不充分なるものならば、他に如何なるものありて之に達せしめ得べきや。然り眞に吾人の品性を作るものは、吾人の中に存する一種の靈スピリット若くは精神と譯す。以下之を互用すならざる可からず。素より正確に之が定義を下すことは困難なりと雖も、余は實例に依りて其意義を明かにするを得べし。例へば愛國心の如き即ち是なり。何物か能く愛國的品性を作るや、必しも美しき高尚なる理想として之を撰擇せるに由るにあらず、必ずしもネルソン若くはウエリントンウェリントンの如き人の事業行狀を摸するにもあらず、又必ずしも政府の命令にも由らざるなり。凡て此等の諸件ありとしても別に、更に深き或る物、吾人が所謂愛國的精神なるもの、激發なかる可からず。先づ此精神を作興し、之を撫育せよ。愛國的品性既に存し、且つ期せずして實際の生活に顯れ來るへし。他の深高なる品性も亦此の如し。決して製造したるものにあらず。討究の結果に出てたるものにあらず。實に靈に由りて

生れたるものなり、靈より生れたるものあるが故に亦能く靈の要する所を實行し得るあり。

若し愛國的品性の如き一品性に就てかく言ふことを得ば、基督教的品性の如き種類に就ては更に數倍強き語勢を以て斯く言ふを得べきあり。愛國的精神は美にして且つ嘆賞すべし、されども未だ種々の手段に依りても達し難き程高尚なるものにあらず。然れども純潔と愛と宥恕と謙遜との精神は吾人に取りては餘り高きに過ぐ。此等の品性の表面にすら吾人纒かに之に達するを得たるに、誰か復吾人の内心に其の變化を誘起し得るものぞ。若し基督教道德の美花にして殆ど吾人の手足の及び難き山上に開くとせば流れ來る光線を注ぎて此花を開かしめたる太陽には如何ぞ接近することを得んや。吾人は基督教的品性の行爲にすら達し得ざるに、如何にして其精神に達し得べきや。然れども前節に言へる所にして若し眞實から

は、此の品性に達すべき唯一の原動力はイエスの靈を吾人の内心に作興し、且つ之を撫育するに在るのみ。吾人は此等を論述するに當り吾人は宜しく事實に關する良心の注意の必要に就て既に言へる所を記憶し、且つ陥り易き道德的美辭を離れて、確實なる歴史上の記録に吾人の研究の基礎を置かんよとを務めしめよ。

第一に吾人の留意すべきものは、イエス彼自身か人々をして義に至らしむる唯一のものとして、新しき靈(精神)を彼等に分與すること。深く注意せしことなりとす。彼は熱心なる求道者の一人に對つて「人もし新に生ぜざれば神の國を見るよと能はず」と曰ひ、且つ彼は之を以て心靈的に即ち「靈に由りて」再誕するの意義に解し、之を以て其教訓の第一義と爲せり。此故に斯世に於ける彼の道德的目的と天職とは單に道德を教へ若くは模範を示すに非らずして、彼自身に言へる如く「聖靈を以てパプテスマを施す」に在りき。而して彼が之を成

効したるゑとはヨハンの如き、ペテロの如き、マグダラのマリヤの如き其他無数の人々が彼に接して性質一變せるを見て知るを得べし。彼は新しき靈即ち彼自身に有せる純潔、愛宥、恕、謙遜の靈を彼等の衷心に注ぎ、かくて新しき品性を彼等に與へたり。

吾人はイエスが實際斯世に生活せし間は此事あるべきことを理解し得へし。大なる人物の精神は之に親炙する者の精神とある、勇者は其側に立てる者に勇敢の精神を鼓吹し、高潔なる心は之に近くもの心を潔くす。人若しイエスの驚くべき人格の何たるを解せば、彼に親炙し、其聲を聞き、其眼光に觸れたる者の、皆彼の言語に感激したるのみならず、實際其性質を變化して彼の精神に一致するに至りしことを信し得べし。ナポレオンにして其率ゆる軍隊に此の如き感化を有せしとせば、イエスが其親しき朋友等に此の如き感化を有せしは頗る當然ありと謂ふ可し。然れども此の如き感化には制限ありて、人の

精神に及ぼす感化は必ず其感化の權威者自身が面前に現存するを要するなり。此の如き感化は根底より個人的にして、個人的要素の欠くる時、精神的感動も亦枯凋するを免れず。故に大人物の死と共に其個人的感化の消失するは明かなる事實にして、暫くは彼と相知りし者の心に存すべきも、又後世の大なる記念と摸範たることあるべきも、此等は皆個人的感化の幻影に過ぎず。其人は最早在らず。吾人は他に新しき感動を求めざるべからず。

斯くイエスにして此世に生活せし間は、彼に親炙する人々の智情意に新しき靈を分與するの力を有すべきも、故に亦基督教的品性を實現するの力をも與へ得べきも、此は皆暫時の事にして、唯彼が個人的に生存し且つ人々面前に現存する間のみ、而して彼が一たび斯世を去ると共に此感化力も亦消失すべしとは吾人が預想する所にして、未だ曾て其顔を見ず、其未だ曾て聲を聞かざる今日の吾人に新しき



靈を分與し得べしとも見えざるなり。然れども其實大に之に反して、新約聖書と凡ての道德上に於て最も著しき現象に吾人が逢着するは亦此靈にてあるなり。單に歴史的記録として福音書中に記載せらるゝイエスの語中、以上の問題に關して甚だ獨特なる見解を發見し得べし。是は上に言へる如く其生涯の間自己の人格に由りて驚くべき靈的(精神的)感化を顯はせり、而して其生活の終に近づくに際し、聊も自己の感化の減退を憂ふる色あるを見ず。否大に之と異りて、彼は感化の不朽のみならず其増大をすら約束したり。彼が之を以て人々にバプテスマを授けし所の靈而して彼が世を去ると共に必ず消失し、たるべく思はれし所の靈は彼が嘗てより更に多く分與せらるべきことを最強く宣言したる同じ靈あり。此靈に就ては彼は明かに自己の人格が現在して在世の時と聊も異なることなき意義を之に與へ、且つ彼は——彼と

の個人的一致の存る意義に於て——自ら世を去らざることを言明して以て此意義を表示したり。是れ生涯の終りに於けるイエスの訓言の調子にして、其最も特異なる性質あり。他人の臨終の教訓中一も之に似たるものなし。而してイエスは彼の福音書中に記載せらるゝ「われは世の未まで常に爾曹と偕に在るなり」との最後の語に於て之を括せり。請ふ此語を熟考せよ。請ふ、試に親愛せられたる友人、若くは信任せられたる首領の殘せる最後の遺言ありと想像せよ。凄切悲惨の情、無限に吾人を感動せしむるものなくんばあらず。是れ抑も何故ぞや。他あし此の如き事は實際全く有り得べからざる、眞に空漠虛妄の事に過ぎずして、唯纔に詩的眞理の幾分を殘すが爲なるのみ。懐かしき紀念、仰くべき模範、此等は或は殘るへし、然れども嗚呼其人は即ち無し。慕はしき容貌も亦く力ある感化も亦く、殘存するものは最早其人に非らざるあり。吾人は彼が虛無に歸せしことを言はざる可

し、吾人又人の靈魂は土塊に等しとは言はざる可し、されど彼が一たび存在したりし如くに存在せざるは餘り明白に過ぐる事實なり。吾人は唯彼の共に在らざるか爲に、益寂寥を感じ、益悲哀に陥るあらんのみ、是れ親愛せられたる友人若くは首領が「われ常に爾曹と共に在りてふ言を残して世を去ることらは、實に悲惨の極なり」と謂ふ所以なり。然るに是れ實にイエスの最後の言なりき。

請ふ眼を新約聖書——余は再言す。默示せられたる經典としてに非ず單に記録として——の他の記事に轉せよ。而して吾人の發見する所は何なりや、而して吾人の發見する所は、回復し難き個人的損失の悲みと彼が世に在りし時、人を導き、人を勵まし人を教化せしことを回想するの歎息と、彼は最早死せりてふ哀れある綫言なる乎。此等は吾人が新約聖書中に發見すべしと予想する語調にして、恰も「記念歌」の如き一種の悲調あるべき筈なり。然るに吾人は全く相反

ゆる調子の其紙上に振動せるを發見す。イエスの最後の語は悉く眞實なりしてふ證據は何れの巻にも充滿せり。彼の生涯の終に至りて益明かとなりし大思想は、彼が人々に對する靈的關係即ち單に教訓若くは模範たるのみならず、之より以上の人格を以て人々に接せし其の關係は悉く人々の裏に活ける靈として永存すべしてふことなりき。而して余は慎重に言はんとす。これ即ち新約書の記者の最も意を致したる第一義なりと。

イエスの靈は彼が斯世に在りて親しく彼等と語を交へし時の如く、然かく眞實に、直接に、力強く、且個人的に今猶ほ彼等を動かし、彼等を陶冶し、彼等を變化せしめつゝあること、是れ實に、疑もなく新約聖書文學の大ある特異點なり。世界幾多の文學中一も之に似たるものあるか。且つ該記者等は此點に於て皆一致せり。聖ヨハネにはイエスは凋落しつゝある理想にあらずして彼は「彼其靈をもて我儕に賜へ

りと言へり、歴史上に於て最善くイエスを知りし聖ペテロには、彼の「爾曹の中に在りてふ語を以て猶ほ内部的な生活に現存せるを認めたり、聖ヤコブも殆ど同じき語を以て其の「我儕の衷に住む」ことを告ぐ。聖パウロはイエスを以て斯世に現存せし時の如く、惡に對する優勝ある道德力と爲し、且つ曰く「活かす靈の法はイエスキリストに因て罪と死の法より我を釋せり」と、余は唯四個の引照を爲せしに過ぎず。雖も新約聖書を讀むものは誰も此類の語の無數なるを知る可し。余は再言す、新約全書中最も注意すべく、又最も看過し難き點は、イエスは嘗て有りし如くに今猶ほ變ずるおとなく、且つ彼は死せる記念にあらずして、活ける靈なりとの主張即ち是れあり。彼の最後の語は、慄切悲惨の物語にあらず、彼は嘗て肉体を有せし日と同じく、靈として力として現存として、又一個人格として彼等記者と共に、又彼等記者の中に存在したりき。

是れ果して如何なる意義をや、是れ最有力ある立證にして、イエスが斯くあるべしと云へる特別ある先見と、初代基督記者等の斯くありたりしてふ確乎たる主張との契合なり。是れ果して偉且つ善なる人物の感化は世の道德的勢力に追加せられたる有力なる遺産なりと云ふの意なる乎、或は、新約聖書記者等が、其靈を以て「彼等の衷に活けるキリスト」に就て語るは、唯イエスの思想が猶ほ深く彼等を感じしつゝありと云ふに止まる乎。前者を然りとするものは、歴史上最も著き現象たるもの——建設者の死後直ちに盛ある勢もて勃興したる基督教會——を以て平凡なる事件と考ふるものなり。後者を以て然りと爲すものは、新約聖書を以て世界に於ける最も誇張の宗教書、故に亦最も劣悪なる經典の一と爲すものなり。如何となれば健全ならざる宗教と事實に對する良心を缺ける敬神とよりも劣悪なるもの他にあるべしとは思はれざればなり。然らばイエスの靈猶

は吾人のうちに活けりとは、是れ果して如何なる意義や、前章に於ける論述は、キリストの事實が全く無意義のものにあらずるゑとを示すに足りしならん。吾人はキリストの事實は、單に古代歴史の事實にあらず、亦内部の權威、要求、勸誘たることを發見せり。是れ少くもイエスは吾人の衷に在りて靈と生命たることを發見する。初歩にあらずや、是れ此事實に抵抗するものと服従するものと齊しく之を告白する所あり。蓋しイエスの要求と權威と感化とに抵抗するが如き事實の存するあるは明白にして、吾人の多數は——若し眞に反省せば——特に頑強に抵抗を試むるものあるにあらずや。吾人はイエスの言語及模範に對して、屢巽然として自ら驚くばかりの高聲に於て「否」を稱へざりし乎。吾人は何が故に此の如く吾人の心力を勞する乎。又何が故に一千九百年前の教訓と模範とに逆はんが爲にかゝる決心を要する乎。吾人ナリストトールの倫理上の事を語るを聽

くゑとあるも、敢て此の如き抵抗を表はすこととなく、又心力を勞せずして容易く之に服従せざるゑとを得るあり。然れども吾人眞にイエスが言語若くは模範に由りて吾人に告ぐるを聽くに當り、若し彼に服従するを好まざることある時は、吾人は頑固に時として決然として「否」と言はざるべからず。余は再び之を問はん、吾人何を以て斯く心力を勞する乎。請ふ吾人をして吾人の抵抗に由りて吾人の抵抗しつゝある者の實際に存在するゑとを知らしめよ、是れ陳套なる倫理的教訓にあらず、亦因縁なき倫理的模範にもあらず、更に活力ある更に生氣あるもの、即ち靈と生命たるなり。是れ昔富める若き宰、サマリヤの婦に對せし如き同し靈的、個人的現在を以て、今日の吾人に對しつゝある所のイエスなり。基督教中の或る一事を拒むことは、其の極例へば、ピクテタスの思想教訓を拒むが如く、單に其思想若くは教訓を拒むにあらずるを發見するに至る可し、即ち此等の思想教訓

を拒むは之と共に吾人に觸接し、吾人の心を動かす、又吾人を勸説する一個の靈を拒む所以にして吾人の「否」は特に他と異なるものあり。是れイエスの死せる教訓若くは模範の傳説にあらずして、活ける靈的人格たることを不承知ながら證明するものに非らずや。若し彼を拒むことに由りてすら猶ほイエスの事實の證明を爲さざるを得ずとせば、彼に服従するに由りて此事實の意義益明かあるは言を待たざる可し。今吾人は漠然たる架空の談に陥るを避けて、明瞭にして且實際ある點より發足すべし。イエスが自己の靈的實現に就て語るときに、往々高遠なる神秘の域に達するものとあるも、然かも之を卑近の事物に連結せざることあり。特に之を彼の言語、即ち命令と約束とに連結す。人をして眞に此の命令と約束とに接して、之を熟考し、之を自己の生活に適用し、而して其意義を實現するを力めしめよ。然れば其人は唯イエスの一言一語を讀むよりも遙に以上の事を爲しつゝ、

あるを自ら發見すべし。彼は自己の理性と良心と感情と意志とに於て一の見る可からざる勢力——自ら驚く程に我を啓導し、我に力を與へ、活氣を添へ且つ清める所の勢力——の湧き來ることを發見すべし。此の如くして生活せる一日は新しき靈即ちイエスの靈に従つて生活せるなり。是れ果して吾人自身の創始せるものあるや。縱令如何なる力あるも、是れ單なる倫理的教訓の所爲ありと思考するを得べきや。之に關する使徒の説明は最も當を得たるものなり。曰く「我儕帕子なくして鏡に照すが如く主の榮を見、榮に榮いや増りて其やなと像に化るあり、これ主即ち靈に由りてなり」と。唯イエス自身のみ、唯彼の活ける人格のみイエスの靈を吾人に與ふることを得べし。心靈的文學(聖書)中の最著しき現象は吾人の道德史中の事實に、其反響を有す。而して之が説明は唯此の如く言ふの外あり。曰く「凡て他の道德宗教の首領たる人格は、其人格中に存する凡てのものと共に、斯世に

於ける其生活の終ると同時に消失せざるを得ざるを以て通則とすれども、此處に此の通則を破る一大例外あり」と。イエスが斯世に在りし時、彼に親炙せる人々の精神に吹き入るゝことを得たりし靈——模範及教訓以上の或物——は、今猶ほ彼が吾人に與ふる所のものあり、一言にして之を謂ば、彼は「我儕と共に在る」あり。彼個人的現在に於ては、個人的現在に存する感動と共に——其形態を變じて、今や肉體に於ては見る可からずと雖も、其眞實に於て又其實體に於て永存するなり。是れ即靈なり。且つ「靈は靈と相合す」イエスの靈は——余は將に之を「彼」と言はんと欲す、如何となれば靈精神は眞に人たるもの、人格なればなり——能く吾人の靈に通じ、吾人の靈亦能くイエスの靈に通ずるよとを得ば、吾人の生活は到底達し難しと見えたる基督教的品性を實現するよとを得べし。主は即ち靈なり。新しき理想的道徳の立法者たるものは亦之れが感化者たるなり。

是れ即ち品性に關するキリストの事實の意義——二重の意義——たるなり。イエスは品性の理想たると同時に、又人を感動して此理想に達せしむるの力なり。品性の領域に於てイエスの有する此意義は、全倫理界に於て之と肩を双ぶるものあることなし。世の道徳教師は之をイエスに比すれば、唯品性に關する疑問を弄ぶに過ぎるのみ。人の品性に關する問題——善あらざる可からずとは何の意ぞ、又實際如何にして善と爲り得る乎——の眞正なる解釋に就ては、アリストートルの卓論も、ペロンンの訓言も、ソクラテスの徳行も、若くは釋迦の模範も、之をイエスが初は其模範と教訓とに由り、次には更に驚くべき其永存する個人的靈の現在と勢力とに由りて、人の品性の依て以て實現せらるべき靈を分與するに比すれば、果して如何。此點に於てイエスの名は倫理界の全域を支配するものなり。果して然らば、是れ實に、小は吾人各個に關し、大は世界に關する大な

る事實にあらずや、最も眞實なる要點に於て、吾人は生活の問題は畢竟品性の問題たるを知る。吾人が成効と失敗との最も深き原因は第二義なる世上の毀譽褒貶にあらずして、吾人の品性に在るなり。此の不思議ある吾人の生活は唯品性の爲めの生活あるが如し。内部の良心の世界之を暗示するのみならず、外部の境遇の世界も亦之を暗示す。如何となれば、幸運を冀ひ、快樂を求め、斯世の財産、位地、名譽等を望むが如き、目的を果す爲に此の世界は寧ろ不適當ある世界なり。事物の變化極りなき、運命の定まらざる、健康と財産と幸福とを損害し、破壊する所の預想し難き幾多の事情は、凡て生活なるものは此等の目的を達せん爲に存するに非らず、容易に得て容易に奪はれ、又縱令之を得るも、之を保ち難きものを得んと欲するは、明かに生活の重なる目的に非らざることを示すものあり。畢竟するに斯世は斯世的に生活すべき斯世にあらずるなり。されと試みに此等の状態を觀察せよ。此の變化

此の危険、此の不定は却て品性を形成するに助あるものにあらずる乎。此等は柔和に、心靈的に、忍耐に、謙遜に、無私に、親愛に、人を導き至る所の訓練となることなき乎。生活の境遇はよし凡ての目的を破壊するも、品性訓練の目的のみは之を廢棄せず。否此の目的に對つて貢獻せずんば止まず。是れ余が生活は品性の爲に設けられたるもの、如しと謂ふ所以なり。果して然らば、品性の問題を充分に解釋する唯一の人格たるイエスあるに非らずんば、人世は適當に且つ豊富に生活せられ能はざるあり。されば此範圍に於て、少くもキリストの事實の最初の意義の限れる範圍に於て、吾人は敢て基督信者たるを欲せざる乎。

## 第四章 キリストの事實の更に進歩せる

## 意義

既に辨論したる所に由りて明かに爲りし事はキリストに事實の意義未だ其の充分なる意義に達せずと即ち是れなり。此事實は更に進んで推究すべき疑問を提起し來らざるを得ず。若し既に明にせし所を以て此事實の最初の意義なりとせば是れ唯其最初たるのみ、此意義其自身更に其意義を有せざる可からず。吾人は既に他の人物に就て言ひ得るよりも以上のことをイエスに就て言へり。然れども既に他の人物よりも以上のことを言ひ得るものあらば、猶ほ更に之より以上のことを言はざる可からず。吾人現在の位地に停止するとは心に満足する能はざる所あり。イエスは彼れ自身全然純潔無垢の理想的品性を示し、且つ其肉体は縱令十數世紀以前に斯世を去

りしと雖も、猶ほ人心に最も個人的ある感化を與ふるの力を有し、多くの人々は到底達し難く見えし理想を少くも或る程度まで實現するを得たりと言ふのみにして此に筆を擱かん乎、全然結論なき議論となるべし。若し倫理的及び心靈的に之より以下を言ひ得ずんば更に之より以上を言ふは智識的責任に屬せざる乎。キリストの事實の最初の意義の發見は、更に進歩せる解答を要する新疑問を吾人の前に提供するものなり。

此の新しき疑問は大凡左の如きものなる可し。既に論述せるが如き歴史と經驗の現象は、果して人生及び自然に關する吾人の哲學に對して亦、全然特異にして且つ有力ある意義を有せざるや。是れ果して他の現象と共に同一に思惟することを得るや。吾人は「斯世の暗黒の裡に於て人の運命と靈魂の運命とを指導する所の勢力の性質に就きて、燦然たる特種の光明を與ふるものとして」之を承認し得ざるや。



將又之を承認すべからざるや、吾人は或る信仰の基礎、即ち吾人の靈性が屢求めて屢徒勞に歸せしが如き、神に關する眞實なる或る信仰の基礎を此の中に發見すると能はざるや、イエスの在世以來、世人は皆信仰上の疑問は彼に於て殆ど其解答を發見せりとの感を避け能はざるも、如し、此事實は争ふ可からざる事實にして、且つ大なる意義なくんばならず、彼の最初の朋友等は其代表者が「主よ我儕誰にゆかんや、永生の言有る者は爾なり」と曰ひし時に此の如く感じ、又彼の最近の弟子も亦此の如く感じたり、即ち「ロバート、エルズミール」の著者は彼の代表する學派は、ペテロの立場とは相異れども、之に對つて求むべき光明ありとの信を懷ひて「昔時ペテロの告白せる如く」今猶ほ告白することを一千八百九十九年の九月に於て、タイムズ新聞に書き遣れり、試みに思へ遠き昔のガラリヤの漁夫と此英近代の記者と、此二人の知識的包圍と其見解の差如何に大なる、然れども神に對

する靈魂の要求は其にかゝる同一の状態を脱すること能はざらしむ。且つ此間の幾世紀に於て求めて休まざる無数の求道者が絶えず同一の告白を爲したるを思へ、既にキリストの事實中に信仰上の大問題を釋すべき全然無比の意義あることを決定すべき明白ある題案は成立せるにあらざや、されば既に發見したるキリストの事實の意義よりするも、又キリスト以後凡ての時代に於ける熱心ある人々の此事實に對する感覺よりするも、吾人は前に掲げたる疑問を研究すべき幾多の理由の存するを見る、然れども之が研究を爲すに當り、吾人は基督教の基本を離れて神學上の教義に入るべしと思ふ可からず、吾人が推究せんと欲するは猶ほキリストの事實、歴史と經驗との活ける事實にして、神學的の理論にあらず、されば品性に關する疑問より信仰に關する疑問に移るに際し、吾人の研究はゲーテの所謂「理論の枯色」を帶ぶることを要せずして、生命の熱氣と鮮麗なる綠色と

を保つことを得るなり。

### 第一 信仰の基礎

信仰の問題は神即ち天地萬有は第一原則なるものの顯現にして又結果なるや否やに關する論理上の知識的講習にあらず。是れよりも更に遙か以上のものにして、人性の推理的側面に由らず、寧ろ眞に人性の全体に由りて提起せられたる個人的問題なりとす。故に其求むる所は單に思想の範疇にあらずして個人的要求を満足せしむるものなり。此問題は到底解釋の望なきものなりや否やに關せずして人の靈性——知識的推理の精神よりは更に深邃、複雜、熱切なる或る物が常に追求し、又追求せんと欲する問題たるなり。彼の希伯來詩人が異郷にて歌ひたる「我がたましひは渴ける如くに神を慕ふ、活ける神をぞしたふ」てふ語より單純直截にして然かも誠實悲哀ある語は古來未だ嘗てあらざる可し。

今日哲學者の一部分に於て、殆ど此の如き祈禱を輕蔑するの傾向あり。吾人は往々心靈の友にして又父たるものを慕ふとを止めて、哲學上に堅く、恐くは亦稍悲むべく、吾人の立脚地を定め、且つ靈魂不滅の願望の如きは實際放棄すべき稍高尚なる一の利己心に過ぎずとの忠告を受くることあり。近代の哲學及文學中に此の如き諷示を爲さざるもの少し。ゲーテを始め、ヘゲル、チョーデ、エリオット若くはマシウ、アノルドの如き皆然り。然れども余は此の如きは全然虛妄なる放棄理當さに放棄すべからざるものを放棄して、自ら誇る所の假托的勇氣なりと信ず。人は決して人格ある神を慕ふの思情と個人的靈魂不滅の希望とを放棄すべきものに非ず。如何と云れば此に其人の眞我存し、其人の眞正なる尊嚴在ればあり人の眞我は其人格的個人性にして、此個人性「此の我に相對して必ず汝を求め、然して是れ以下の何物を以てしても満足せざるあり」此の以下のものを以て満足せよと

命ずるは人と人とするものにあらず。是れ心靈的自殺にして、如何なる哲學的光榮を裝ふとも、決して名譽とすべきものにあらず。それは、かゝる名譽は不名譽の上に立てる名譽あればなり。人の真正なる威嚴は時としては智識的に之を告白するを憚るが如きかゝる個人的要求の中に存す。此等の祈禱は或は空しきものなるやも知る可からず。吾人は屢心靈上の父——活ける人格ある父——を覓めて之を發見し得ざるやも測り難し。吾人又或は永生の門を敲きて開かれざることもやならん。然れども之を求め之を敲く、人は之に由りて其小を表さずして其大を表はすものなり。利己心の鄙吝に非ずして自己の衷に存する、又自身たる無限を表はすものなり。有限なる天地の一部分たるを以て満足せよと命ずるは、實に自己に献ぐる甚だ輕少なる名譽なりと謂ふ可し。

吾人が心靈上の父を求むる深き要求は、果してキリストの事實中に

其應答を發見し得べきや否や、自然及び歴史の如き外界の事實に於て、若くは道德の如き内界の事實に於ても亦此要求の満足を見ることあきは明白あるが如し。余は今此點に就て簡單に之を論述すべし。先づ自然に就きて語らんに、抑も自然なるものは吾人に告ぐるに、人の運命と希望とに對して無頓着なる、又全く相反する無心無覺の大きな勢力を以てするものなり。自然に溫和美麗の容觀あれども、亦之と共に殘忍猛惡の容觀あり。微細の物にすら宏大なる思想を含蓄するが如しと思へば、亦自己の最も高貴なる製作物に對し、無情にも其死滅するに一任して顧みざるが如きものあり。信仰に對する應答は一も見出す可からずして唯「妖夢」あるのみ。自然は唯所謂我は生かし又死なしむるのみ……其の他を知らずと言へる、誑かすが如き殘酷なる謎語を以て吾人の問題を弄するあるのみ。然らば歴史は如何。歴史は物質界に於けるよりも人の活動と智能とを發動したりと雖も

此裡果して吾人の信仰を確め、且つ獎勵する至高の目的計劃なるもの存在するや、歴史とはげに失望を與ふる漠然たる語ある哉。世界若し増進する目的ありとするも、吾人は如何にして之を實際的意義を有する目的と爲すを得るや。歴史は一大活劇ならんも、其作者は誰なるか。登場者之を知らず、又誰ありて之を知らしむるものあし。世界は凡て舞臺の如し。而して其の悲劇的喜劇家たる吾人は、止むなく自己の小さき役目を務めて而して去り行くあり。今や自然と歴史との外界を離れて内界に移れば如何。此に、殊に良心の領域に於て、吾人の神たるべき「活ける神」に就て多少の徵證を發見することあるべし。然れとも唯僅少のみ。吾人の裏に存する良心の律法は、其性質著く命令的にして又強制的あるを見れば、必ず立法者ありて立法者は道德的人格なるべきを暗示す。然れども此の事さへも人生の事實及び原則——道德あるものは即ち吾人に取りて善と満足と力との源にして

其反對は即ち禍にして、不安と法弱との源たるとの事實——より以上吾人を導き得べきか疑はしむ。此に多少の暗示あれども、其暗示たる甚だ僅少にして、確乎たる信仰の基礎と爲すこと能はざるなり。斯く信仰の要求は自然にも、歴史にも、又良心にも其満足を發見すること能はずと雖も、是れ信仰の希望と思情とを否定するものにあらず。又決して其虚妄を證するものに非ず。唯満足を與へざるのみ。古今の賢哲は此點に於て相一致す。該博なる教師中此問題に關して高き位地を占むるものは——セーキスピアは此等の問題に容喩せず——古代に於てはプラト、中世に於てはダンテ、近代に於てはペーコンに如くなかるべし。此三人は共に一致して、自然及び人生に由りて信仰の願望を満足せしめんと欲する理論的企圖の結果なきこと少くも其無力なることを稱導せり。ペーコンは曰く「余が判断に従ふときは安全にあらず」と。ダンテは一度ならず之を「結果なき願望な

り」と曰へり。又プラトリーの書中最も人を感ぜしむるものは、人智の「筏」に乗りて暗黒と疑惑との海洋を渡るてふ一節なるべし。彼は曰く「若し更に安固に嚮導し得る神の道の如きものを見出さずんば、余は思ふ、決して危険なきに非ず」と。

附註——此節と前節に於て論ぜし問題は、時間の都合上甚だ簡單に過るを免れず。余が此に論ぜし所を以て、自然、歴史、及び道徳的、生活中に神なしと思考せる如くに思ふ可からず。余が論ぜんと欲する所は、此等は、吾人の靈魂の父にして子として、吾人を承認し且つ愛撫する「活ける神」に「達せしめず」と謂ふに在り。自然は道徳的にして歴史は進歩的なりとするも、猶ほ此等は唯律法に就て語るに過ぎず。而して律法るものは、此頃に於けるパンプトン講演者中有力なる一人の言へる如く、其働きたるや普遍的なり。個人的區別を爲さず、衡平ならず又愛憐あし。決して人格者とし

て吾人を待遇せすと「イリシグウォルス」人的及神的人格。ニエーヤンは其著「グラソマリ、オプ、アツセント」に於て良心は更に律法以上のものを吾人に教ゆと爲す。然れども本文に於て余が述べし如く、律法以上を暗示するも是れ隨伴的證明の一種にして、辛ふして「正義」に對つて進む「生命」の律法以上のものあるを告ぐるに過ぎず。吾人の個人的心靈は此等の非人格的原則及び勢力の

明聲の裏に猶ほ靈魂の父を求めて止まざる也。プラトリーの一語は人を感ぜしむるのみならず、頗る暗示を與へて吾人の心を提醒するものあり。更に安固に嚮導し得る神の道の如きもの」と云ふを讀みて吾人は「道」肉體となりて我儕の間に宿れり。てふ福音記者の語を聯想せざる能はず。果して然らば、キリストの事實は信仰の要求が是迄他の側面に對つて空しく尋ね求めたる神の道に似たるものも意義を有せざる乎。主よ我儕誰に行かんや。てふ使徒等の

懇求の一側面は吾人既に之を理解せり。されど吾人は彼等と共に「永生の言を有てるものは爾あり」と言ふとを得るや。

吾人は今日或る人々には餘り重を爲さる使徒等の證明に由ることなく、イエスが屢神を求むる靈魂の満足は彼自身に由りて得らるゝとを語りし事實に照して、益此の疑問を發するの勇氣を得るものあり。余は往々註釋學上、批評學上の議論を惹起すべき「我を見しものは父を見しなり」てふ如き語を引照せざるべし。然れども共觀福音書中吾人の目的を充たすに足るべき語あり。是れバイシユヲハが「其の正純なる、確にロギアの原本中に在りたることを證すに足る」となすものなり。即ちイエスが萬物は父の賜ふ所にして「子(イエス自身なり)ちよび子の顯はす所の者の外に父を識る者なし」と言へる時彼は之に由りて三の事項を言明せり。即ち(一)信仰の要求の對象は父即ち活ける愛の神なり、(二)又プラト、ダンテ、ベリコンと齊しく人類は獨

力此神に達し能はず、(三)されど彼は此要求に満足なる應答を與へ、且つ其他の問題と唯彼に由りて満足を得べきことを確認せり。此の如く嘗て世界に出現せる最も偉大なる宗教教師は直ちに信仰の要求に於ける人類の位地を知り、且つ其要求は彼自身に由りて其應答を得るゝとを信ぜり。プラトの如く誤なき道を待ち望むにあらずして、既に真理其物の保證を捉へ得たり。然り吾人はイエスか此の如く語るに當りて充分之に耳を傾くべきものあるを發見せるなり。

信仰の保證に就て、キリストの事實中果して如何ある意義ありや。吾人之を熟考するに當りて發見したる最要點は、イエスの超自然的なるものと即ち是あり。余は今全く先入を去り、法律家の如く嚴密なる文法上の意義に於て之を言ふなり。彼は吾人が熟知せるが如き普通人性を作れる勢力に由りて思考せられ得べきものにあらず、且つ之を

拒むことは道理上實際爲し得べきとにあらざる也。余は敢て奇跡に關する問題を提起せざるべし。是れイエス死より復活せりてふ歴史的證據の到底答辨し難きが故に廻避するにはあらざるあり。然れども、之を提起せざる理由は、元來此問題たる神及び自然に關する預想條件を帶ぶるが故、之が辨論を爲すときは、更に幾多の議論を誘起するを以てなり。若しイエスの奇跡にして議論の主題と爲し得べくんば、況んや其品性は更にイエスの超自然的人物たるを表明せざらんや。是れテニスンが最大奇跡よりも更に驚くべき奇跡と稱せしものにして、イエスの無罪でふ一事既に證し得て餘ありと云ふべし。彼の無罪なることは歴史上の事實にして、想像に非らざることは吾人既に之を確保すへきの理由を有す。而して其事實たるべきことは、判斷を誤り易き教義的僻見を有せざる多數の人々許容する所なり。教授オールは此等の人々の中に、ヘーゲル派の人としてはドーブ、マ

ルハイチケ、ローゼンクランツ、ハートケの諸長、折衷學派の人としてはシユライエルマツヘル、バイシユラハ、ローテ、リツチルの諸氏、自由派の人としてはハノゼ、センケルの二氏を挙げ、リプシウスの如き、全然奇跡に反對すれども、イエスの無罪を承認する一人として之を挙げたり。此の如く大家の姓名を列擧するは精神に光明を與へずして、却て所謂体を勞からすものなりと雖も、此等の大家が齊しく許容せる問題の何物たるかを知り得る人には、かゝる姓名も多少の印象を殘さずんばならず。如何に假托するも無罪は到底超自然的なり。蓋し罪惡は吾人が知れる如く、人性中普く存するものにして、罪惡なき所には即ち超自然あるなり。而して其超自然は禽獸の場合に於けるが如き人インフレイマン以下のにあらざるや勿論なり。然りと雖も吾人は此無罪すら猶ほ論争を免るゝ能はざることを忘る可からず。されどイエスの超自然的人格たることは、最早前に生活と品性とに關して論述した

が如くイエスの活ける靈が勢力となりたる人に對しては、個人的確信及び印象として、又其保證として、能く承認せらるべきなり。かゝる人はイエスの要求若くは獨逸批評家の同意を待つ必要なく、己れ自ら其見證者たり。人若しイエスにして自己の舊き勢力より遙に強き新生活の原則たり又能力たることを發見せば、彼は直ちに躊躇することなく、昔時に於ける如く「もし此人神より出ずば何事をも行得ざるべし」と論ずるに至るべし。「神より」とは正に如何ある意なるべきや吾人未だ之を説明し得るの位地に達せずと雖も、少くも人間生活の自然的勢力より以上の勢力イエスの身に顯現せりとの意義を有するあり。是れ實に獨一無比なる事實にして、吾人が此に超自然的と稱するものあり。此の間信仰問題に對して特異ある意義なくんばあらず。かゝる超自然的事實は吾人が嘗て解答を求めて苦心したる所の大問題に就て、凡て他の現象より遙かに優れる解答なることを吾

人に告ぐるなり。自然界の答は吾人既に之を聞けり、されど此には吾人の猶ほ傾聽すべき超自然的事實の在るあり。以上は遂に吾人が到達したる位地にして、信仰の疑問に答ふる世上各種の事實の聲甚だ不充分ある中に在りて、全然歴史上の他の事實中に編入し難き特異の意義を有する此のキリストの事實は忽然として現出せり。此事實は即ち此等の事實以上の事實にして超越的事實なり。されば此事實の意義は其終局語にして、其の以下に在る幾多の小事實の意義を以て之を制限し、若くは之を抹殺するを許さず。凡ての事實は、之を罪と死の如き大なる事實よりも更に大なることを自ら表明せるキリストの事實に比すれば、悉く小事實に過ぎざれば此事實に對して、人の心靈は信仰問題の最後の解答を得んことを望み、且つキリストの超越的事實中に存する力は、果して如何なる種類に屬するかを問はんと欲するあり。



(附註) — 余は此には主として前に記述したるが如きイエスの死後に於ける靈的(若くは精神的)生活に關して言へるものなり。然れども此事にして許容せられなば彼の福音書に記する墳墓に勝ちて身体の復活したる事は、稍當然なる且つ強き歴史的の根據を得るものにして、之を信じ難きの背理として容易に棄却する能はざるべし。

第一に此力は心靈的の力にして、無覺無意義の強迫力にあらず。無覺無意義の強迫力に對しては、縱令己むなくして之に服従することあるも、理性を有する靈として、吾人は實際に之よりも勝るものなり。此力は即ち靈にして、吾人の心靈中最高の位地を占むるものあり。其強迫は常に道理に合し、且つ之に服従すると否とは全く吾人の自由たるなり次に、イエスと共に存する此力は倫理的なり。是れ吾人の心に在る聖潔、眞實及び愛の力にして、且つ此等の諸徳を知り得るも亦此

力に由るなり。最後に、此力は個人的あり、余は此語を用ふるに必しも個人的行爲者ありとは主張せざるべし。——勿論此意義もなきにあらず、それは凡て靈的勢力中には實際其行爲者あるを以てなり。——寧ろ個人々々として吾人を待つてふ意義に於てかく言はんと欲するなり。此力は吾人を一括して吾人に接せず。否吾人を個別して殆ど吾人各個の爲にのみ存するが如し彼の自然の法則と歴史の過程とに在りては、吾人其の普通的意義を會得するも、未だ其中に吾人各個に對する意義を發見すること能はず。されどキリストの事實に在りては全く之に反し、普遍的言語を以て之を言明すること甚だ困難なるも、然かも吾人の心靈上に如何ある意義を有するやは、各人の既に確知する所たるあり。

斯くキリストの事實中に在る力は心靈的、倫理的、又個人的に吾人と關係を結ぶの力なりとせば、是れ實に吾人が求めつゝある神を指

名するものにあらずや。是れ最も簡單に且つ實際に「活ける神」を發見せるものにあらずや。吾人の心靈の要求する「活ける神」は明かに此の如き力たるに外ならず。此に至りて、吾人は遂に之を知る。神てふ者は自然の大機關の一部分にあらず。否自然界に於ける秩序の維持者にして、心靈上の父を求むる吾人の靈なる如くに亦靈なるものなり。且つ吾人は善ならざる者を神と稱すること能はざるを以て倫理的に神聖あらざるべからず。又神は個人々々として吾人を待ち決して彼の自然が其無窮なる過程の一項として吾人を處理するが如くなる可からず。さればイエスと共に存する力は、實に少くも吾人の心靈の友にして又父ある「活ける神」在すてふ信仰の端緒なり。而して神に對する吾人の要求は——若し幸に神を發見するを得ば——キリストの事實の一層、安固なる道に於て其安心の地を發見すべきなり。

此の如くキリストの事實は「活ける神」を信する信仰の基礎なり。此はイエスの教へし教訓若くは教理にあらずして、イエス自身に在ることとに注意すべし。此の如き區別は甚だ必要にして、信仰は教師中最高ある者の思想に基かずして、最高き神の道なるものと自から明ある事實に基くあり。此事實はイエスの語れる所にあらず。イエスの語れる所は福音書中に在り。此事實は神の語り給ふ所にして、神の語り給ふ所は歴史と經驗との裡に在り。此區別の必要なる點は是なり。即ち信仰は新しき思想を要せず、されど新しき事實を要す。思想としては、基督教信仰の中心點——父ある神に於ける信頼、墳墓を超へたる希望の如き——も未だ全く新しきものとは稱す可からず。熱心にして高尚なる多くの人々は夙に此等の思想を捉へたり。さらば何の欠くる所ありて一步を進めて信仰とならざるや他なし。唯思想と推論と翹望とのみありし故なり。此等の問題にして吾人の思想は必ずしも實

際に符合する確實の尺度にあらず。人生の頑固なる事實、殊に死てふ最後の事實の前には、此の如き思想も逡巡して脆くも其力を失ふに非ずや。ウォルヅウォルスの詩句に曰く

限なき希望は人の有する所あれど  
之を高く立てんとせば

程よき平均を失はんとす

莊嚴なる勢もて地より立ち上る

煙の柱のごとくに

空氣薄きところに到れば、

消え失せて見るべくもあらず。

誰か、死の呼吸の空氣薄き處に於て、希望と推論とが眞に約束の地に吾人を導く雲の柱にして幻想の煙より出づる煙の柱に非らざることを確証し得るものありや。此の如き信仰は或る性質の人に由りて

常に養はるゝことあるも、事實の磐上に確立せざる概念の築造あるが故に、決して多數の人の心を捉ふること能はざるあり。然れども基督教の信仰は確乎たる基礎を有せり。而して其基礎はイエスの思想にあらずして、イエスの事實たるなり。是れ管に新しき教理なるのみならず亦實に新しき基本を供するものと謂はざる可からず。是れ父の如き神在すてふ理論より來らずして、歴史上經驗上の一大現象に由れるものあり。此の如きは實に信仰の要求する所なり。夫れ信仰は希臘神話中地に觸るゝ毎に屈し難き力を回復すと稱せられたる彼のアンテユスの如き乎。而して其の觸るゝ所の地と云ふは事實、即ちキリストの事實に外ならず。

かく信仰の基礎をキリストの事實に置き、而して後、此事實は前に吾人が研究したるが如く二個の側面を有する事實——同時に外部の歴史にして又内部的經驗なる事實——たることを爰に想起するの

適當なるを信ず、吾人の信仰の基く所は此二側面の事實にして他語之を言へば、信仰は歴史上並に經驗上の證明を有するものなり。現今の思想界に於ては後者は之を承認すれども、前者は之を無用視せんとするの有力なる傾向あり。チ、エイチ、グリーン若くはマルチノ博士の如きは、信仰は唯内部の宗教的意識にのみ權威を有し、外部の歴史的啓示に依頼するものに非ずとなす。外部の權威を以て信仰を證明すること能はざるは素より眞理あり——此の眞理はペーローの如き辨證家の爲に等閑に付せられたれども——唯内部的にのみ其の神より出たることを保證し得べしと雖も、是れ必しも内部的經驗をのみ重んじて、之が爲に外部的啓示をも無用視し得可べしと云ふ可きには非らざるなり。實際内部的經驗は外部的啓示を離れて單に其正確あることを維持し難し。未だ是れ眞正に確定せられたる證明に非らざるを以てあり。然るに基督教の元來主張せる

所は、神は相互に證明する二個の方法を以て、即ち歴史的キリストの證明は内部の證明に一致し且つ之を保證グリーンの思へる如く之を置き換ふるには非ずして、吾人に語り給ふと爲すなり。是れ亦イエス自身の方法にして、實にカノン、ゴールの云へる如く、彼は疑もなく二重の基礎の上に宗教的信仰を置かんことを企てたるなり。此歴史的證明は吾人の信仰を創興するものに非ず、是れ其爲し能はざる所なり。唯吾人が誤れる信仰に陥らざることを保證するものは歴史的證明にして、キリストに關する外部及び内部の證明相合し歴史上のものは心靈上のものを批准し、心靈上のものは歴史上のものに調印し、斯くて信仰は始めて完全なるキリストの事實——活ける神を意義するものとしてより外に説明し難き、歴史並に經驗に存する事實の上に確立するあり。

吾人は今信仰の種々なる内容に就て辨論するの必要あり。如何と云

れば、イエスにして若し人に對する神の道ミチなりとせば、此一事既に萬事を包含するを以てなり。若し神にして語り給はば、吾人を満足せしむる程度に於て語り給ふなる可し。必ずしも凡の事を示し給ふものにはあらず。唯吾人の知るを要する事、即ち神の性質如何を示し給ふに過ぎるへし。されど神はイエスを遣はせる神なり。第一義として之を許せば、信仰は自ら其爲すべきことを爲さん。例へば靈魂不滅の如き此れあり。基督教の信仰は一死萬事を了せざるの證明は一も之を有せず。然れども神の性質を確め得ば、信仰は墳墓の鎖鑰を握るもの、誰なるやを知り、且つ、平靜なる希望を以て能く己の愛する者を神に托するを得るなり。之を彼のスピリチュアリズム(降神術)が此鎖鑰を開かんと試むるに比すれば、更に遙に優れるものあるは言を待たざるなり。神の性質は信仰に關する凡ての疑問中の疑問なり。此疑問にして其答を得ば、信仰は此に始めて萬事に於て其の安心の所を得べき

あり。

然らば筆を爰に止めて、吾人は既に不充分ながらも聊遺漏なくキリストの事實の意義を論述し得たりと言ふべきや。否々、此の如きは到底爲し能はざる所にして、吾人は更に吾人をして前進せざるを得ざらむる所の疑問を提起せり。吾人はイエスの到底斯世の現象の限界内に於て説明評價し難き人物なるを發見せり。吾人は既に特異なる意義に於て彼の「神より來れることを述べたり。彼は吾人が知れる如き人々よりも以上に在るものあり。此等は凡て明瞭にせざる可からず。吾人は早晚其意義の何たるやを言明せざる可からず。既に言へる所のものに加へて、吾人は最後に於て、此の愈深遠なるキリストの事實は果して何あるや、確く之を問はざる可からざるは、甚だ明白なりとす。

第二 「道は即ち神なり」

今吾人の面前に提供せられたる疑問は、漢谿の間在りてマテルホルンの高峯を頭上に望むが如く、吾人をして轉た眩暈を感ぜしむるものあり、然りかく吾人をして眩暈を感ぜしむるものありと雖も一瞥能く其頂點を見ることが得べし、蓋し疑問は是あり。若しイエスにして——彼の意識と彼の無罪と彼の死せざる個人的存在と勢力と、彼の莊大なる事業と彼の特徴とに於て——人間以上なりとせば吾人は彼に就て何を言ふべきや、之に答ふるに唯一の答あり、而して此答たるや、全然信じ難きものにもあらず、論理上に於ても、宗教上に於ても、齊しく避くべからざるものあるのみ。

此議論の合理的或は論理的側面は極めて簡單に之を論述し得べし。若しイエスにして吾人が知れる如き人々よりも以上のものあらしめば、吾人は彼を指して一種の怪物——人間以上にして半は神の如き——と謂ふことを得べきや。此の如き説の非なるは言下に暴露せられん

此の如く論述するは、歴史上經驗上の基本に合せず且つ同時に解し難き幾多の反對論を惹き起して底止す。所なかる可し、イエスに於て、吾人能く人間の特質と神の特質と——罪を赦し、若くは新しき道德的眞我を創興するの力を有するが如きはこれ即ち神の特質にあらずや——を發見し得れども、然かも、人にも非らず、神にも非らざる特質は一も發見することを得ず。此の如き存在者を吾人の思想中に許容するの不可なることは擧げて論ずるを用ひず。半神半人の教は單に異教主義に立戻るものにして、此の如きアリヤン若く准アリヤン説は、歴史的及び經驗的に一も自己を辯護すべきものを有せず。且つ却て哲學的に之に對する幾多の反對論を有するなり。是の如きキリストは福音書を讀むもの、承認すること能はざる所に於て、亦チ、エイチ、グリーンダ(嬢)に、余は全く相反せる立脚地より氏の姓名を擧げしも、此には好意と感謝とを以てせんと欲すの所

謂古代宗教の鬼神説より脱化し來りて哲學者等の瞬間も同意するものと能はざる所の議論なりとす。是れ宜しく公平に且つ遺漏なく論究せざるべからざる問題あり。例へばカイクムがイエスを以て「超人間的の奇跡」と爲し或はチヤンニングが「イエス、キリストは人間以上なりと信ず」と言ひあがら、纒に此に止まりて更に其説明を爲さざるが如き正統的信仰の立場より不満足を唱ふるまでも亦く純然たる知識上の立場より見ても不満足を唱へざるを得ず。

抑も此等の説は果して嚴密正確なる表明なるや。若し嚴密正確なる意義を含まずとせば、是れキリストの大問題に就て知識上價值なき廻避にあらざるや。若し此等の語にして嚴密正確なる意義を含むとせば、此の如きは是れ——宜しく明白に理解せしめよ——歷史上些の根據あるなく、且つ哲學も全然之を棄却せんとする立場なりと謂ふの外な

し。

果して然らば則ち如何。此に唯一の途を残せり嘗て基督教思想の最初の時代に於て、天啓に接したる炯眼の一記者が、其筆を擧み、議論と説明と用ひずして、「道は即ち神なり」と記せし時、此の途を取りしなり。此記者の徹底せる批評眼は世之を認識すること甚は少なし。然れども彼は一躍幾世紀の論争を起超して、一瞥の下に、凡の歴史が屢之が解釋を試みしも、アリヤン説の如き中間的憶説は歴史的にも論理的にも遂に維持し難く、其結果單に人性を認むるか或は神性を認むるかとの兩者其一を出てざるに至る結局を洞見せり。かゝる結論に基きて、彼はイエスに關する最善最高の記述に止まらず、己の能く記述し得る唯一の記述を爲せり。基督信者としては、彼はキリストを單なる人と記述すること能はざりき。吾人も亦然り。思想家としては、彼はキリストを中間的神性と記述すること能はざりき。吾人も亦然り。

されば到底記述せざる可らずとせば、せば唯一事を記述し得るのみ吾人も亦キリストの誰たるやを言明せざる可らずとせば實に唯一事を言明し得るのみ。余は再言す、吾人は全然已むを得ざるものに由りて、全然信し難きものより救はるゝなり。

余は甚だ簡單に、故に亦甚不十分に、此の論理的推論を爲せしと雖も最早是れ以上を論ぜざる可し。如何となれば、是れ唯益信仰を難境に誘ふに過ぎずして、心靈的眞理は到底此の如くしては其正確なる點に到達し得ざるを以てあり。イエスの神性は吾人の到達せる論理的結論たるのみにあらず、亦實に基督教的經驗の經緯に織り成されたるものあり。基督信者は基督信者として、深く之に包容せられ、又深く之に歸依せるものあり。

イエスの神性は實に基督教の論理的餘論にあらずして基督教其物の全体あるなり、吾人が是迄辨論し來りたるキリストの事實の意

義終に之に外あらず。基督信者がイエスより受けたる所のものは單に神に關する教訓にあらず、神より出て來れる生命と力とあり。彼等は神に就て發見せんと願へるものをキリストの事實中に發見し、又爾(即ち神)の爾の遣はしたまへるイエス、キリストを知るてふ永生の定義を讀むに當りて、彼等は神とキリストとの區別を宗教的に維持するゑと能はざるあり。彼等は神はキリスト以外に求む可からずして其キリストの中に在し給ふるを發見せり。人はイエスの人的生命と人格とに接して更に高尚ある力の本源に導く所の人的生命と人格とを發見するのみに非らず、亦更に神自身よりも劣る所なきを告知する者の現存することと其力とを發見せり。イエスが吾人に接し又吾人の裡に働くとき、彼は神唯之を爲し給ふ事を爲すなり。若しされなくんば凡の基督教的經驗は空しきものあり。若し果して此の如くんば吾人がイエスの誰なるやを言明し得る道一あるのみ。ヘルマ



「吾人彼の神たることを告白するは、是れ彼に正當なる名を獻げたるなり」と云へるは實に適當たるを失はず、實際神に外あらざる者に對して吾人は如何ある他の名を獻け得べきや。キリストの神性に關する基督教的意義は實に此の如し。信條の教義的定義の如きに至りては全く第二義に屬するものなり。イエスにして實際諸君に取りて神たるの外なき者に非ずんば、縱令其の神性の意義を主張するも是れ全く事實にはあらざるあり。イエスにして實際此の如くなるものと云ふんば、正統的信條も根據なき空文のみ、されどイエスにして果して此の如くんば、諸君は彼に「正當なる名」を獻くるの外他に其途あらざるべし。且つ縱令アマナシヤン信條及び其他の表白——此等に對して正しき判定を下さんと欲せば、其歴史的事情を適當に記憶せざる可からず——に對して、諸君は多少の障礙を有するにも拘はらず、必ずや言語上に於ても、亦事實彼の彼たる正當なる名を以て稱へざるを得ざるべし。

且つ夫れ凡の深厚正直なる基督教生活は此基礎の上に實行せらるるものなり。吾人若しイエスを以て朋友、教師若くは嚮導者と爲すに止まらず、最も正確なる内容的意義に於て吾人の主と爲すに至らば吾人の基督教生活は決して滯滞することなかるべし。イエスの主たるおとどは個人的生活の上に特權を有す。情緒も意志も皆彼に獻げて彼の有と爲し、吾人の最後の道德的上告處たる彼の權威の前に良心すらも己が權力を譲らざる可からず。實際の生活に於て此の如き完全なる歸參は未だ容易に實現せられずと雖も、觀念に於ては到底基督教より分離す可からざるものなり。扱て此の如き關係は唯一ある神に對する外誰にも許容し難き關係にして、之を以て人に許さば、是れ全然智識上にも、道德上にも、自尊の精神と、人の人たるの体面とを放擲するものなり。されど斯る關係は唯神に對する時にのみ適當なるも

のにして、若し斯る關係にして果して基督教生活の眞成分たるイエ  
スに對する關係たらしめば、彼の神性を告白するは、是れ只基督教生  
活が實際的に告白したる所の者に其「正當なる名」を附するものに外な  
らざるなり以上論述し來れるものを最も簡單に要言すれば、吾人は  
イエスに對して字義通り、腹藏なく「我が主」と言ふに非らざれば、眞に  
基督信者たるを得ざるなり。然れども吾人は他の如何なる受造物に  
對しても決して此の如く言ふと能はざるべし。吾人若し「我が主」と  
言ふことを得ば、亦誠實ある使徒と共に「我が神」と言ひ加ふるゝとを  
得ざらんや若し基督信者にして主の神性を維持するを好まざるも  
のあらば、敬重すべき己れの人格をすら遂に維持するに困難なるを  
發見するに至らん。

イエスは即ち神なりとは一見容易に信じ難き結論ありと雖も、吾人  
が遂に到達せる避く可からざる結論なり。道理は半神としてイエス

を承認する能はず。宗教は又彼を唯中間的顯現として思考するゝと  
能はざるなり。故に既にイエスの人間以上なるを言ひ得る所の吾人  
は、更に進んで「道は即ち神あり」と言はざるを得ざる可し。

(附註)——余は勿論、イエスは神なりてふ語を以て、リツテル派の所謂

キリストは宗教上吾人に取りて神たるの價值を有するが故に  
神として之を思考し得べしてふ意義ありと爲すものに非ず。歴  
史的論理的推論は宗教的推論と相合し、而して後者の判断を事  
實として確定するに至るものなり。

斯る思想は、少しく之を思考せば、實に人を壓伏するが如き大思想に  
して、之を信すとは果して何事あるや、之を悟ること頗る困難を覺  
ゆるものあり、縦令歴史上の事實の論理的結果と、凡の基督教生活と  
經驗とに於ける其勢力とを許容するものと雖も、此の如き智識は猶  
餘りに高遠にして、之に達するゝとの容易ならざるを感ずるなり。吾

人は之に關して提供せられたる二三の難問に對つて、大膽に抵抗するの覺悟なかる可からず。例へば吾人は最早コペルニカス前に生活せるものに非ずてふ議論の如き、屢引照として吾人の記憶を催促せらるゝことあるあり。吾人は往々地球は是迄宇宙の中心にして、其住民は造物者の瞳子の如く其保護を受けたりと信ぜられたるも、今日は最早無數の世界より成れる宏大にして際涯なき組織の一斑點に過ぎず、故に無限なる大原因が自己の宇宙は無際的空間を占むるに拘はらず、其の世界中極小なる地球の民の狀貌を取りて其間に宿れりと想像すが如きは正氣の沙汰にあらざるべきやとの冷評的質問を受くることあり。然れども此の如きは唯想像を驚殺せんとするものに過ぎずして、怪むに足らざる也。吾人は以外の宇宙に就て少しも知る所なし。此地球の外他の世界に理性と道理とを有する生命存せざれば即ち可あり。若し然らば、此世界は物質的に於ては些細なるに

拘はらず、猶ほ創造の最高頂たるを失はざるなり。縱令然らざるも、人類は即ち人類にして神を知りて之を愛し之を尊ぶの能力を有する靈的存在者あり。人類果して斯の如き人類たらば、如何に無數の世界あるも亦た何ぞ關せんや。縱令他の世界に人類に似たる存在者あるも其人類たるまど争て加之に過ぎたるものあらんや。今や此の小さき世界に於て、最も切迫せる心靈的利害あり。されば物質と心靈との眞の輕重を知り給ふ神には、此世界は決して小さき世界にはあらざるあり。テルツリアンは問ふて曰く「さらば化身は果して神には適當なるものなりや」と。而して又自ら之に答へて曰く「是れ神には最も適當なるものにして、吾人の救拯ほど神に取りて貴きもの無ければなり」と。スペンサーは「時間空間の制限をも加ふる能はず、此全世界も比較的極小なる其結果に過ぎざる、彼の大原因が人の狀貌を取れりとは果して信む得べきものありや」との疑問を吾人に對つて提

出せるときに、氏は神に關する由々しき概念を吾人に供せるが如く思へるならんも、然れども神の概念なきものを以て縱令小部分にもせよ、其心靈的利害の測る可からざる價值あることを忘るゝまでに所有物の大なるに依りて物質化せられたる世の所謂富豪の一種あるが如く思より更に誤れる神の概念はあらざるべきなり。

此種の反對論は吾人能く之を排斥し得るも、神の化身を信ずるの眞の困難は猶ほ他に存するなり如何に有力なる議論も唯纔に化身を以て事實として吾人の心に建設するを得べきのみ、然れども、單に我之を拒むことを得ず、若くは「我之を承認す」と言ふのみならず、更に吾人をして「我之を信ず」と言はしむるもの唯一あり、即ち化身の必要を悟る是あり、是れ甚だ必要あるものにして、余は諸君にして或點まで此事實の必然の理を認むるに非らざれば、化身の事實と事實として實際に了解するに至ること能はずと謂はんと欲す、此事實が神より

出でたる必然的眞理として吾人に訴へ來る時、始めて吾人自身に對して其眞理たるを得べきあり、斯くキリストの事實の此の驚くべき意義を實際に承認せざる可からずとせば、吾人は更に進んで此意義の意義を問はざる可からず、吾人は何故に神人と爲り給ひしかを問はざる可からざるなり。

此疑問の答は即ちキリストの事實の最後の意義にして、次章に於て之を論述せんと欲する所のものなり、然れども余は次章の緒論として、又此章の結論として、吾人が是迄研究したる、信仰の要求に對する且つ神の性質の啓示たるキリストの意義中化身の思想が果して如何なる位地を占むるか、之に就て此に一言するの必要あることを信す、然り而して神の性質——神は愛ありてふ——に就て、信仰に最高の言語を與ふものは唯化身あるのみ。

抑も愛とは何ぞや、蓋し愛は親切若くは好意の如きものにあらずし

て更に眞粹なる性質を有す。愛は即ち犠牲にして、一點の私なく、自己と自己の所有とを與ふるものなり。吾人若し神を愛なりと言はば、神は自ら犠牲とあり、且つ無私にして、自己の有せるもののみならず、己れ自身をすら惜まざる寛大の性あることを言ひ得ざる可からず。然るに若し神の道（道）、音信者啓示者たるものにして、神と一体たるに非らざれば、世界に對する神の恩顧と注意とは、或は之を表明することあらんも、深き意義に於て眞實ある愛の表明あるものはある可からざる也。恩顧と注意とは未だ神自身に於て自己を與ふることを實際に表はすものにはあらず。愛とは元來自己を與ふることなり。余は神は愛にあらずとは勿論主張せざれども、然れども、かゝる場合に於て、其愛は未だ眞實に吾人に對して愛として表明實行せられたるものには非らざるあり。されどイエスにして果して神の化身たる道たらば、是に於て神の愛われらに顯はれたり」と謂ふ可し。此に於て神は自己を與へつゝ

あり。他を遣しつゝあるに非ず、自身を犠牲と爲しつゝあるあり。神は唯善にして恵み深く、吾人と認識し、吾人を祐助するのみに非らず、最眞實なる文字通りの意義に於て吾人を愛するものなり。神は世を愛せり」とは如何にも大なる語なりと謂ふべし。或人の言「へるく」未だ神は天地を創り給へり、若くは、神は世を審判し給ふて、吾語の意義を理解せざる人々にして、神は愛ありて、吾語を理解せしもの如何に多きや。是れ今や既に基督教の莊嚴なる常套となれるものあり。然れども、化身を除けば基督教をして眞に斯く言はしむるものあることなし。如何となれば、化身の外、全能なる神が自己を與へ給ふこと、其無私と、其全き愛とを表明するもの復他にあらざるを以てなり。

## 第五章 キリストの事實の最後の意義

吾人若しキリストの事實に於て發見したる意義の意義を問はんと欲せば、今一度此事實の何たるかを明かにするは蓋し必要なる可し。抑もキリストに於て吾人が發見したる所の意義は、彼は神の生命と力との化身たることは是れあり。而して若し吾人にして其理由とし根據とする所のものを了解するに非らざれば、實際之を會得するの困難なることを感ずとせば、此化身が歴史上如何あるものなるやを記憶するの必要なくんばあらず。乞ふ再びキリストの事實を討究せしめよ。

然れども何故に此必要ありやと言へば、此問題に就て爰に歴史的にあらざる一種の思考法ありて、哲學的に之を研究し、以て解釋あらざる解釋を吾人に與へんとすればなり。吾人は屢之を聞く、化身の思想

は實に神の性質と神の人に對する關係との中に含蓄せらる。若し神は果して靈にして又愛ならば、常に其啓示を受くるに堪ふる如くに創造したる存在者、即ち人に自己を顯はさんことを求めざる可からず。是れ即ち神として遂に人の貌を取るに至らしむるものなり。此の如く化身は神の生活法の一部にして、化身の理由と根據とは實に此に發見するを得べしと。此の如き思想の傾向は殊にヘーゲルの特有にして、亦抽象的論理の術語を以て基督教を解釋せんと欲する凡の哲學者の特有たるなり。神學上に於ける同一の傾向は、博士ウエスコットの所謂「創造の福音」——詳言すれば「人類の創造に包含せられたる化身の約束」——てふ思想と共に稍多數の神學者に由りて推獎せられたり。一見人の注意を惹くべき論理上の艶麗なきにあらざるも、歴史に立ち返りて之を見る時は、其艶麗も忽ち枯凋せざるを得ず。如何となれば、哲學は唯宇宙の事實を論ずる時に於てのみ有益に且つ

價值あるものにして、かゝる思考法は今此に問題と爲れる如き歴史上の事實を嚴密に研究するに堪え得ざるものあればあり蓋し神の自啓のキリストに於て其最頂點に達せることは吾人之を承認し得べしと雖も、然れどもキリストとは誰ぞや、宜しく此人を見るべし神キリストの事實に由りて世に來り給へるは、單に人の中に來り給へるに非らず、亦悲哀と屈辱と、苦痛との裡に、涙と祈禱と、滴たる熱汗の裡に來り給へるあり、又單に人世勞苦の裡に入り給へるにあらず、亦言ひ難く、測り難き苦難の裡に投じ給へるなり、是れ即ち吾人が此に思ひ廻らさんと欲する所の神の自啓、神の化身あるなり、嘗にベツレヘムのみあらず、ナザレのみにあらず、ゲツセマテとカルバリとは吾人が思考せんと欲する所なり、是れ化身の哲學的、思想にあらず、實に化身の歴史的、事實なり、若し人と爲れる神の自啓は愛する靈なる神の思想中に包含せりと言はば、是れ未だ一も云ふべきものを言はざ

るものあり、此等は果して「悲みの人」に於て見るが如き自啓は、神自身の生活中に包含せらるるとの謂ひなるや、吾人は更に之を討究するの必要あるを見るあり、唯吾人の哲學はかゝる事實を説明するの理論たるを要す、基督教を論する尊敬すべき一著者(ケヤード)曰く、「神てふ思想はキリストの人格に顯はれたる人類との關係をも包含するものあるが如し」と、是れ果して如何なる關係なるや、單に人と爲り給へりとの謂ひなる乎、是れ事實を叙するに頗る淺薄なる方法にあらずや、人と爲り給へりとは、實に「悲みの人」「荆棘の冠を戴ける人」と爲り給へるなり、余は今此人を見る、余は晚餐の席上に、此人の無限なる悲哀を見、ゲツセマテの園中に此人の大なる苦難と熱汗とを見るなり、余は「父よ若しかあはし」とて、ふ此人の聲を聞き、「我神、わが神」てふ此人の叫びを耳にす、而して余は將に問はんと欲す、「神てふ思想」の中には、果して此の如き人類との關係をも包含するやと、然り、化身の思想に關して如

何ある哲學的考察の行はるゝあるも、吾人は此等が化身の事實を説明し盡すことを主張せざるべし。さらば唯歴史に對せよ。此に猶ほ多くの言ふべきものあるなり。然かく慕ふべく、又麗はしき、されど終には眞に畏るべく、又測り難き此化身の理由と根據とは、吾人猶ほ之を探求せざるべからず。

更に多くの言べきものあるを發見し得ると否とに關せず、吾人の猶探求すべき方向はイエスに由りて明かありと謂ふべし。イエスは暗睡なる彼の生涯の益危機に迫るの際に於て、——余は最後の晚餐の設立に關する記事の信據すべきことに就ては左程の異論あるべしと思はざるなり——彼の血は「罪の赦の爲に」濺るゝものあることを言へり。此語は化身の意義を闡くに足る、鍵鑰にして、之を採用するを拒むが如きは、唯迴避心より出たりと思ふの外あるべし。化身の意義は實に罪惡の事實中に發見せざる可からず。イエス自ら之

を言へり。此一事實既に充分なりと謂はざる可からず。

吾人が進んで研究せんと欲する所の問題は、是れ實に如何なる問題なるか。其解釋に光明を得んが爲には、吾人は凡の問題中最も暗黒なる、最も困難なる、又最も失望すべき問題に移らざる可からず。加之、吾人が今進み入らんと欲する所の主題は、吾人の全心を擧げ最も之に面することを厭ふものにして、吾人は往々此事實を疑ひ、且つ其意義を弱め、殊に自己に對して之を適用するを拒むものあり。故に吾人をして此に再言せしめよ、イエスを理解せんと欲する人々に對し今此方向を取て進むべきことを命ずるものは實にイエス自身なりと。若し吾人にして憶面なく此の罪惡の事實を討究することを欲せずんば、遺憾なくキリストの事實を論述すること能はざることも亦イエスに依りて之を承認せしめよ。

### 第一 罪惡の實在



抑も罪惡に關する討究は、若し嚴密に且つ有効に之を爲し遂げんと欲せば、之れ自己の討究に外ならざる也。若し夫れ普く人類に對して有罪の責を歸し、且つ事實に依り、若くは基督教外の大家の證明に依りて、之を實證するが如きは頗る容易の業ありとす。希臘の悲劇家中の一人は曰く「罪は凡ての人に普通なり」羅馬の道德家は又曰く「我等は皆罪を犯せり」と。而して近代の文學、殊に小説の中には同一の告白に滿つるのみならず、忌憚なく人生を寫すは厭ふ可く亦不道德なりとの批難に對して自己を辨護せり。然れども、此の如き有罪の一般的彈劾は良心に何等の印象をも刻すること能はず。恰も論理書が人皆死すべきものなりと主張すと雖も、凡の人は唯大前提として之を承認するのみにして、未だ嘗て少しも死することを實認せざるが如し。罪惡は死と同じく個人的事實と爲るに非らざれば、嚴肅に之を實認すること能はざるあり。吾人は唯其の直接に吾人自身に關して起り來

れるを知るに及んで、始めて實際に之を知り得るのみ。果して然らば「罪惡」てふ語は其人自ら罪人たるを感する時の外は決して嚴肅適切の意義を有せざるなり。若し罪惡に對する普遍的彈劾にして、充分に其の有罪なることを個人に指示すること能はずんば、誰か能く之を指示することを得べきや。曰くイエス、キリストあり。人其の邪惡に沈溺して、自己の生涯を不幸と慘苦との裡に陥らしめたる時に當り、屢惡の嚴然として存在することを実認し、自己の愚鈍ありしを嘆息することあきに非らざるも、然れども之すら未だ悉く罪惡の感念を喚起するの力あるとあし又人の良心には之に對する譴責を形成するものなきに非らざれども、亦往々其力を失ひ、容易に其知覺を鈍らし、遂には死し去りて毫も其譴責を全ふすること能はざるに至ること多し。夫れ生活の正邪善惡に對して、心靈を鋭くし、良心の聲を蘇生せしむるものは獨りイエス

キリストなりとす。人々をして罪を悟らしむるものは彼自身の靈なることを言ひしは實に彼なりき。吾人は今罪惡の何たるやを討究するに際して、キリストの光明ある恩惠ある事實より遠かりつゝありと思ふ可からず。否吾人が罪を犯せることを告白せざる可からるは、實に此事實に相對するを以てなり。

人若しキリストの事實をして實際に、充分に、且つ公明に自己の生活を照らしめば、此事實は罪惡に關して凡そ左の三事を語るべきなり。

其の(第一)は、人自ら其善なるものを認むれども、却て其惡なるものを選択して之を行ふことあり。此譴責は、吾人之に相對せば、直に之を受けざることを能はず。善なるものは吾人能く之を知り、管にキリストの事實——己に論述せるが如く、單なる歴史的事實より以上の——のみならず、生活と人性との事實は幾度か此結論を吾人の面前に提供せ

り。吾人は決して之に對して、獸類と同じく善き生活の方法を辨知することなしと言ふこと能はず。されど吾人は何故か思想と言語と行動とに於て惡なるものを選んで之を遂行す。吾人は能く之を認知す。普遍的にあらずして具体的に、又特殊的に、偶然の例外にあらず、却て吾人生活の特徴として之を認知するなり。吾人は昨年或は前週前日の事を回想して、惡しき習癖、若くは不親切なる言語、若くは利己の行動、鄙吝の念等を能く列擧し得へし。吾人は能く一の罪狀——常に附纏ふ所の罪惡——を携ふるものあり。而して如何に屢之に打ち負けたるか能く之を數ふること得べし。而して其數や吾人の頭髪よりも甚た多きことを知るあり。吾人の過去は盡く此罪の爲に費やされ吾人の品性は此罪の隨伴者なるが如く、吾人の性質は此罪を住居と爲るか如く思はるるなり。余は殊更に惡人を指して之を謂ふに非ず。又必しも甚しき敗徳を擧げて之を語るに非ず。未だ嘗てイエス、キリ

をとして自己の生活の事實に就て自己の良心を動かしめたることなかりし所の一般普通の人をして、今此事實に於て吾人の發見せる所に對し、虚心坦懐過去に於ける自己の歲月を點檢せしめよ。彼は果して自己の最も力ある根深き性僻と、思想及び生活の日々の慣習と、幾千度も繰り返せる性行とは、總て高尚ある愛より出でず、又已か認知せし最高のもを擇ふには非ずして、却て俗世の「眼の慾」「肉の慾」若くは——恐くは最も普通なる——日々平然として之に陥りしも今は已自身にすら之を認めて告白することを愧づる卑しき勢より起る驕傲より出でたるを發見することなき乎。

此事は亦イエスの靈が罪に就きて吾人に悟らしむる第二の點に進み至らしむ。且つ此點は甚だ個人的にして、直接に第一人稱を以て語るを可とす。イエスは余をして少くも此事の決して言ひ遁るべきものに非らざることを感ぜしむ。他語之を言へば、余は嘗に凡の人と同

しく單に罪ありと云ふに止まらず、幾多の特殊ある箇條に就きて罪を犯したることを感ぜしむるあり。余は他人に就て斯く言ふこと能はず、實に余は他人に對して幾多の恕すべきものあることを感ずるなり。故にパリサイ主義の驕慢に陥ることなくして余は何處までも彼等を宣告すること能はず、されど余自身に對して審判を下す時は一も此の如き驕慢あることなし。素より外部の境遇と内部の性質とに由りて來る所の誘惑ありと雖も、此等の爲に余は罪を犯せる有罪者ありとの批難を免るゝことなし。此批難を免ること能はざるの理由二あり。其一は、縱令如何なる境遇と性質とが余をして罪を犯すに至らしめたるも、余は實に自ら惡事を爲せしに止まらず、又實に之を爲すことを好みたり。此の愛好は屢顧へる所の境遇を作り、又屢適當なる誘惑を醸成したり。是れ自己の心に對して余の能く知れる事實にして、他人の心に關しては決して之と同一に知るゝと能はざる所

のものなり。かく余は他人を宣告し能はざるものを以て余自身を宣告するあり。其二は余は他人に關しては一も之を知らざれども、余自身に關しては之を知れる今一の事あり。余は自ら更に善き選擇を爲し又更に善き方法を取り得たる場合ありしを知る。余は人性の經驗を爲すに當りて、余をして善人たらしめたるべき特別の理由ありしを知る。余は余の生ひ立ちに於ける種々ある恩恵を想ひ起し、又生活の鍛煉に於ける種々なる警戒を記憶す。一は余か心を呼び起し、一は余に取りて有益なりし事物を告知するなり。隣人に就ては決して知ること能はざる此等の事實を枚擧すれば、一般人類に對する普遍的彈劾若くは他人に對する種々の批難を離れて、予は實に少くも宥す可からざる、特に愧つへき罪人なりしあとを發見す。かくて余が他人の罪を定む可からざる原則は、轉じて余自身の罪を定めざる可らざる原則となれり。此原則の何たるかは實にホルンズの語れる如し

曰く

既に爲せし過ちは數へ知るども、

拒みて爲さざりしあとを如何て知らんや。

眞に然り。余は素よりホルンズの氣の毒なる生涯を批評することを好まず。されど、此辨疏は二様に之を解するあとを得べし。他人はいざ知らず、余に於ては能く自ら「拒みて爲さざりしあと」を知るなり。余は余の拒みし恩寵を知る。且つ之に由りて余自身を審判し、ペンヤンの所謂「他人は皆我よりも善き心を有するあと」を感じず。又此問題に關して屢論する所ありし大なる著者(ロー)の語を引かんに、曰く「神は自己の罪惡の外、罪惡の大なるあとを知り得る如何なる力をも人に與へ給はず。故に各人の知れる最も大なる罪人は已自身たるあり」と。是れ更に眞なりと謂ふ可し。是れイエス、キリストに由りて、自己の生活の罪ある生活なりしあとを學びたる人々が、使徒と共に、最も明白なる

理由を以て自ら「罪人の首長なり」と稱する所以あり。此等は凡て(第三)の點に吾人を導くものなり。吾人は自己を知るか故に吾人自身を宣告す。然れども、イエスに就てサマリヤの婦が「我すべて行し事を我に告げし」と言ひしが如く、此イエスは吾人自身の外にも我を知る者ありてふ、眞面目さ大事を新に吾人に實現せしむ。此の吾人以外の者は單に人的審判者にはあらざるべし。神は果して如何に言ひ給ふべきや、「イエスが吾人に確知せしめたる、活ける聖き、人格ある神は果して如何に言ひべきや。其審判は吾人自身に對して吾人か下す所のものよりも、寛大にして且嚴格あるなき乎。神は實に善あり、然れども罪を憎むまゝとに由りて、其善を愛するまゝとを表はし給ふ」神あり、彼は果して如何に言ひ給ふ可きや。神は吾人の實際に反して吾人を處置し給ふ能ふと能はず、而して吾人の實際は果して如何、吾人の實際は既に發見したる所の如し。即ち吾人は自ら善を知

りて惡を擇び、言ひ遁る可き所もあく、又最も深き過失に依りて、吾人を引き留めたる數千の理由と制裁とを棄て、顧みざりしなり。若し神にして果して神あらば、若し果して道德的に神たるものからしめば、此等に對して神は果して如何なる關係を有し給ふ可きや、又如何なる關係を有し給はざる可からざるや。吾人の宗教は今や不幸ある頓挫を來せり。今や吾人の神の探求は、幸にして神を發見し得たりしと雖も、餘り眞實に又餘り近くに、吾人神を發見し、神亦吾人を發見し給ふを冀はざるかがき、暗澹たる、恐懼心に遮られ、「我魂は渴ける如くに活ける神をぞ慕ふ、何れのとにか我ゆきて神のみまへに出でん」と吾人の叫びは、將に忽然として「已れ何處にゆきて、なんぢの聖前を遁れんや」とふ他の叫びに變ぜんとするなり。吾人は今や神の思想を好まざ、來世の念を恐れ、願ふ所、勉むる所は、將に神を忘れんとするに在り。死の如き、神を思ひ起さしむるものは、將に悉く之を迴避せんとす。か

くて良心は吾人をして全く怯懦に陥らしむるに至れり。此等の思想は、未だキリスト恩恵の光被せざる異教徒の暗黒なる恐懼心に等しきものなりや。之を然りと答ふるは甚だ容易かれども、必しも然らず。信仰に對するキリストの事實の意義は、實に異教徒の如く殘忍、邪惡、不聖として神を考ふるに當りて起るが如き恐懼心とは別あるものなり。我は罪人ありと思ふ人の心に起る嚴肅なる思想は、決して殘忍、邪惡、不聖として神を考ふる思想より來るものにはあらず。大に之に反し、正且つ義にして神聖なる神の思想より起り來るものあり。他語之を言へば、神の神たる真正の思想より來るものあり。幾多の事物は吾人をして此等の嚴肅ある思想より離れしめんとするものあり。然れども、それは皆不信の精神、快樂の慾、眞神不在の願ひ等より來るものなり。キリストの事實は此等の恐懼心を不健全なる癡夢として排斥するものに非ず。キリストは之を喚び起し、之を深め、且つ吾人の良

心をして其永遠なる道德的眞理たることを感ずるに至らしむ。彼は唯罪惡のみならず、吾人をして亦審判に就ても認知する所あらしむ。今や不健全と妄信とを去り、道德的の健全と嚴肅と以て之を問はん。吾人は自己の良心の前にすら立ち得ざるに、何を以て人心の探知者たるもの前に立ちて懼るゝとなきを得るや。唯完き者のみ神の前に立ち得べし。果して然らば吾人如何にして神の前に立て懼れなきを得るや。此疑問は廻避せんと欲せば之を廻避するあとを得へし。一方には神の神たるものと、他方には吾人の吾人たるあとを嚴密に考ふるあとを厭ふに由りて之を廻避するあとを得べし。然れども疑問は猶ほ依然として存在するあり。斯くて罪惡に關する問題は益深く、益暗黒に陥りつゝあるが如し。此に至りて之に品性に關する道德的問題以上のものあるなり。吾人既に之を研究したるが如く、此問題中には品性に關する問題もありき

蓋し悪しき習慣と罪ある性僻とは必ず悪しき結果を生じ、又必ず精神上、肉体上の生活に其影響を及ぼすものなり。然れども之れのみを以て未だ人に存する害悪の意義を盡せりとは謂ふ可からず。此等の一時的結果の外猶他に神に對して永遠の結果を生ずるものなくんばあらず。此に吾人がキリストの事實の最初の意義を考究せる際に發見したるものよりは、更に幾多の考究を要するものあり。不道德問題——唯品性として見たる人の品性——は之を罪惡問題——永久的形狀の下に、且つ神の宣告の下に見たる人の品性——比すれば更に小なりと謂はざる可からず。

此に至りて吾人の研究は痛ましき混亂の裏に吾人を投じ去りたるが如き觀あり。品性及び信仰の領域に於て幸福なる希望の光景を展開したるキリストの事實は、今や歡喜の日に於て忽ち陰雲暗澹の光景を呈し、曩時の希望をも幸福をも一時に之を破壊し去るが如き意

義を生じ來れり。試に思へ、罪惡と罪人たる吾人とに對する神の宣告は果して如何なる意義あるや。之を刑罰の意ありとせば、是れ唯言語上の差異のみ。蓋し刑罰とは行爲に顯はれたる不興に外あらざれば也。されど神の宣告は刑罰よりも以上の意義を有す。如何となれば、神の宣告に由りて善は全く消失し、善の希望も亦全く棄却せらるべければなり。是れ果してイエスの遂に吾人を導き來りしものなる乎。キリストの事實は果して初めは美と平和の思想に滿つるも、遂には苦痛と失望との語を以て終結する所のハイチの詩の如きものに過ざる乎。

然れども是れ吾人の罪惡と之に對する神の聖意とに關するイエスキリストの結語には非らざるなり。吾人は猶ほ讀むことを續けざる可からず。

第二 宥恕問題

罪惡と罪惡に對する神の聖意とに關し、キリストの事實に於て發見さるべき意義は甚だ簡單にして議論を容さざるなり。誠意を以て之を迎ふる毎に、イエスの與ふる光明と自由とは、吾人は神より不興と宣告とを蒙るに非らず——全く先に言へる所に反し——して恩恵と嘉納とを受くるものあるを吾人に悟らしむ。若し然らずんば福音書の教ふる所と基督信者の經驗とは全然虛妄に歸せざる可からず。キリストの事實に於て吾人は確に神に對する喜ばしき信任を有ち、惡しき期待にあらずして却て善き幸福なる期待を爲すを得べし。且つ神は吾人に敵せずして永遠に吾人の味方たるの確信を有すに至るべし。若しキリストの事實中に此意義を發見せる基督信者にして、神に關する最後の且つ眞實なる事實として之に安ずるを能はずんば、イエスは吾人の心を誤導せりと謂ふの外なきなり。唯一語の此の矛盾を解き、且つ神の吾人に對する恩寵と保證と、同じ

キリストの事實が罪人に對して神の有し給ふことを感せしむる不興と宣告と、此兩側面を調和し得べきものあり、且つ尙ほ此表面の矛盾は能く之を調和し得らるゝことを觀察せよ。吾人は單に一方を忘れて、他方を承認せんと欲するものにあらず。神は能く吾人を受け入れ、又能く吾人を迎へ給ふと言ふと雖も、吾人は之と同時に、己れは罪に滿ち、且つ神の聖顔は罪を正視し給ふことを記憶せざる可からず。而して此等の衝突は公平明瞭に調和せられざる可からざるなり。余は再び言はん、とす、此に唯一語の之を調和し得べきものあり。宥恕即ち是れなり。宥恕てふ語には罪惡の實在てふ意義を含む。然らざれば宥恕なるものは何を宥恕せんとするや。此語には又神の實在てふ意義を含む。然らざれば、吾人を宥恕すべき者あらざるなり。吾人は實に罪人なり、されど亦實に神に受け入れられ、又神に迎へらるゝなり。而して此二個の事實は相合して神の吾人の罪を宥恕し給ふ意義を形成



するに至るなり。  
結論はかく甚だ單純なるが如しと雖も、是れ決して單純なる結論にはおらざるなり。此に至りて吾人は今や罪の事實の至難なる點即ち罪惡宥恕の問題に到達せるなり。神が宥恕を賜ふてふことは吾人をして殆ど自明の公理たるが如く思はしむ。然れども罪を宥すとは神に取りて果して何事なるや、今少しく注意して、精密に之を考究せしめよ。

吾人は自然に罪を宥すことは神と人と同一にして、神が吾人の罪を宥恕し給ふとは、吾人の一人が他の一人により加へられたる毀害を宥すと異なるなしと思へり。かくてブリストリイ——最も正直にして眞理を愛する——は謂へらく「若し吾人の兄弟にして一旦悔ひ改めざば、縱令一日に七度吾人に罪を犯すとも、吾人は之を宥すべきことを要求せらるゝあり。されば神も亦吾人に對して之れと同一の寛

ある原則に従つて處置し給ふと思ふの外ある可からず」と。此結論はソシナスの言へる如く、「吾人が人々相互に讓與すよりも更に少く神に讓與することを好む」——ソシナスよりブリストリーの議論は出てたり——に非らざるよりは、全然正確なる結論なるが如し。然れども少く注意して之を考察せば、其神に關する思想の全然不充分あること明白にして、此の如き問題は實に人々相互に讓與するよりも更に多く、否甚だ多く神の讓與を許さる所の問題たること明かなるに至る可し。或る時ルイテルが自由意志に關してエラスマスに對つて言ひし語は移して以てソシナス及びブリストリに答ふる處を得ん。曰く「神に關する貴君の思想は餘り人間的なり」と。

道德組織に對する神の關係と之に對する人の關係と二者根本の差別あるを考一考せよ。吾人は單に一私一個の人なり、而して吾人が受

けたる唯相互的に過ぎる毀害を宥せばとて、倫理界に於けるプラト  
 ーの所謂惡と其報酬とを「相較着」せしむる律法之が爲めに撤去せら  
 るゝにもあらず、又曖昧に附せらるゝにもあらず、宇宙の道德組織は  
 吾人に相渉らず、又吾人の行爲に由りて左右せられざるなり。然り吾  
 人の通常宥し得るものは唯一私一個の人としてのみ、若し吾人の宥  
 恕が、共同生活に於ける道德的秩序を危ふするが如き社會に及ぼす  
 所の惡結果を生ずるものとせば、吾人の之を宥すが如きは到底不可  
 能の事に屬す。夫れ全能の神は大なる一私人にあらず、神は宇宙の道  
 德的秩序の本源中心にして、宇宙は實に神に賴りて存在するなり。此  
 の如く神若し此律法を撤去するが如きことあらば、惡と其審判との  
 倫理上當然ある連結も共に撤去せられ、倫理上の混沌と倫理上の無  
 秩序とを來たし、世界は最早道德的の組織を有する世界にあらざる  
 に至るべし。此の如き宥恕は吾人に取りては然らざるも、神に取りて

は實に道德的無政府の行爲たるなり。されば此事に關して神と吾人  
 と間に存する根本的差別を承認するは眞に必要ありとす。最近の米  
 國の一神學者は宥恕の一事は「律法若くは政治に關するものにあら  
 ず、根本的に個人的關係、即ち神と人との關係たるあり」と、且つ「正さる  
 べきは個人的關係にして、人が神の政治と正しき關係に復するは、神  
 と正しき關係を結ぶに至りて始めて爲し得らるゝなり」と論及せり  
 然れども此區別は、余に取りては眞正の價值を有すとは見へざるな  
 り。——唯言語上の抽象的議論を防遏するの用を爲すのみ——如何  
 となれば、律法と神の人格とは元來同一なればなり。神は則ち倫理的  
 秩序なり。博士テールの言の如く「神に於て律法は活けるものとなれ  
 り」故に恰も「律法に關するものにあらざる」如くに、宥恕に於ける神と  
 の個人的關係に於て語ることは眞の意義を得たるものにはあらず  
 余は再言す、神は則ち道德法なりと、神は既に道德法にして吾人は然

らざるが故に、宥恕に關して吾人と神との間に適當なる比較あるべからず。吾人が所謂宥恕と稱するものは、寧ろ吾人が受けたる毀害を忘却するの謂にして、神の吾人に在りてはかゝる單なる忘却あるまじし。若し果して道德的宇宙の基礎たる正しく且つ永遠なる倫理的秩序ありて、罪と其報償とを銜着せば、秩序其物たる者にして此等を分離して猶ほ能く宇宙の神たるを得べきや。蓋し吾人は人には義務中最も明白なるもの、神には其凡の問題中最も深遠なるものなり。

是れ博士チャルモルスの常に言ひしが如く、實に神たる者に適はしき問題に非らずや。是れ個人的怨恨、個人的復仇と云ふが如き小問題にあらず。宇宙の倫理的秩序——神の存在其物たる秩序——に關する問題なり。然らば此問題は果して如何なる性質の問題ありや。是れ同時に罪の價は死なり而して罪惡たる吾人は永生の繼續者なりと宣

言するものなり。是れ即ち道德的宇宙の倫理的秩序に由りて有罪の宣告を受けたる人を救ひ、兼て又人を宣告せる倫理的秩序を救ふものなり。是れ永遠に正しからんと欲し、且つ永遠に不正を正す者たらんと欲するものなり。問題は此に在るなり。人誰も他人を宥すに當りてかゝる問題に際會するまじし。されど神は吾人を宥すに際してかゝる問題に接せざる可からず。是れ神に取りての問題にして、神たる者に適はしき問題たるなり。

畢竟するに罪惡の宥恕に關する問題は、可否の問題即ち單なる意向の問題にあらずして方法の問題なり。神に起り來れる又神たる者に適はしき問題は宥恕の方法途を發見するにあり。而して其途は孰の方面に向つて之を求むべきや。之に就ては、蓋し最早疑點なき所に於て、自ら「我は途なり」と稱せるキリストの事實に立ち返らざる可からざるなり。此の辨論を爲すに當りても余は成る丈け歴史以外に逸出

せざらんことを務めたり、理論は大なる用を爲すべしと雖も亦齟齬を生じ易し、唯事實は眞理の津を問はんと欲する者の針路を指す可き確實なる北斗にして、吾人が今研究しつゝある問題を釋くべきイエスの事實は、取りも直さず其死に關する事實あり罪の宥恕とイエスの死と相關するまとは彼自から之を言へり、教授アノコ一の所謂「神の子がゲツセマナに豫知して、カルバリーにて遭遇せる經驗即ち是なり、吾人は今此事實に立ち返らんと欲す。

是れ實に歴史上最も深奥にして容易に測知し難き光景に立ち返へるものなり、吾人は、既に信して之を神と崇め、且つ崇敬の念を以て其一舉一動を眺め、幾多の人物中獨一無比と爲せしイエスを、今や近代の「偉人(グラッドストーン)が誠に好く、最終の試練と名けたりし其死と苦痛との光景の中に觀せんとす。其の血の如き熱汗、途切れ途切れの祈禱、再三再四其顔色を亂せる苦痛、或は又壓し來れる悲哀

ど沈鬱、戰慄と恐懼、其の言ひ難き不安の憂慮、恐るべき精神の混亂、此等は果して何の意義かある、吾人は實に此の如き苦難の時に當りて殉教者に對すべき謹嚴の念を起すこと能はずして、之に對して嘲弄の指を指すが如き賤劣極まる不信仰者を卑しむものなり、然り謹嚴の精神よりは之を愚弄す可からざるも、眞理の精神より如何にして之を崇敬し得可きや、イエスは此の點に於ても果して獨一無比なるや、果して最大あるや、吾人は雅典の牢獄に於てソクラテースが沈靜に快豁に其の「最終の試練」に臨みたる、驚く可き光景を憶起す、吾人は幾度も「フヒード」の卷末を讀み、其記事の莊麗を嘆賞して止まざるものなり、然るに再び翻つてイエスの苦悶を見れば、彼に對する吾人の崇敬は忽ち打撃を受く、吾人の心は——之を嫌惡し、之に反抗して——イエスも此一事に於ては吾人の完全なる模範と感動とにあらざるものと承認せんと欲するもの、如し、此の一思想にして眞な

らば全然吾人の基督教を變改するの力を有す。此の如き結論より吾人を救ふもの唯一あり。かゝる比較は到底不可能なりてふはと即ち是れあり。かゝる不可能の比較を爲すが故に、此の如き結論をも亦生ずるなり。若しソクラテースが平然として快けに取り上げし杯と、イエスが苦悶して取り離されんことを祈りし杯とが、齊しく單に死たるに止まらば、(後者の死は更に苦痛にて耻づべき死あれども)此の如き結論は正當にして避く可からず。何の考ふる所なく單純にかく言ふも亦不可ならず。然れどもイエスの死にして單純ある死たれば、彼を稱して神なりと謂ふは彼に對して正當の名を與へたるものにあらず。又彼を以て完全なる吾人の理想なりと稱するも亦正しき位地を與へたるものにあらず。然れども彼の死は果して一樣の死なりや、イエス自身は其然らざるを告ぐるなり。

吾人は此に再びイエスの死が罪の赦の爲めなり」と自ら云ひしを憶ひ起さずんばあらず。且つ吾人は罪の赦即ち宥恕の意義に就て考究したる事を想起す。又吾人は既に宥恕——即ち歸する所唯神のみ眞に宥し得る所の宥恕——とは其意義中に必ず罪惡と其報酬とはプラトノの所謂倫理的秩序の全体を、絞着せる處置なるを知らたり。倫理の大法は如何ある事情ありとも決して曖昧糢稜に附す可きものにあらず。否却て之を貴重し、之に準據し、以て其正しとする所に従はざる可からざるなり。扱てイエスは彼の死は「罪の赦」の爲なることを言へるを見れば彼の死は罪と其報菓とを相聯ぬる倫理的秩序に従へる行爲たるを知るべし。夫れイエスの心情は神に對する愛の外他の羈絆あるを知らざる心情、只管喜悅を以てするに非らざれば神を思ふことなき頭腦たるに此の心情を束りこの頭腦を壓迫したる所のは實に此の大法の羈束其恐る可きとは既に宥恕を得

たる吾人の唯纒かに想像し得るのみたりしなり。或る人々は何の者もなく之を語り、且つ其語る所熱心も亦く色彩もあることなし。然れども眞に底に伏せる眞相に思ひ到らば、其心必ず驚愕に滿され。一種言ふ可からざる思想の襲ひ來るものあるを感ずべし。イエスの苦悶は吾人之に對する時、恐怖と驚駭とを以て吾人を苦ましむるものあり。此の如き苦悶は、吾人決して之を愚弄するの意なきも、之を崇敬する處と能はざる人情の弱點を以て、果して其意義を説明し得べきや。將た又人類の罪惡と罪惡を罰する道德的秩序との會合——若し罪より出る倫理的に正しき最後の宥恕あらば、何處にか又如何にしてか必ず起らざる可からざる、恐しき程眞實にして又絶えて曖昧を容さざる會合——より發し來れる未曾有の苦悶としてより外に之を理解するの途あるか。此の如き會合の吾人の生活に起らざりしは、吾人正に之を知る。然らばイエスの苦悶に於て起りしや、吾人はキリス

トの苦悶の杯とソクラテスの鳩毒の杯とのを比較したりとてキリストの爲に愧つるを須ひず。斯る思想は甚だ驚異すべきに似たりと雖も、之を暗示するものは實にイエス自身なり。又キリストに隠れたる物を取りて之を汝等に示すことをあすの力あり記せられたる其の聖靈の啓導を受けたる基督信者の思想より考ふれば、常人の驚異すべき此等の思想を聽きたりとして之に驚き之に反抗せざるのみならず、却て益其眞なるを自證するなり。イエスの死は、罪惡を宣告する神の律法の面前に於て、罪惡の責任を負ふ意義あることは之を疑ふ可からず。基督信者は、自己の信ずる基督教に影響を及ぼすが故にかゝる思想を維持するにはあらず、全く他の理由に依りて之を確信するものなり。イエスの死——吾人をして其のゲッセマテよりカルパリに至る經驗を總へて言ふことを記憶せしめよ——に於て、基督信者は己の受

く可きものかれども之を受けず、若し福音に従つてイエスに來る  
 者とあらば、亦遂に之を受けずして止む可きものあるを認知す吾  
 人にして、其頭上に凡の罪惡を積みあがら神の律法の前に來る者  
 とあらば如何なる運會に逢遇すべきやイエスの若の中に明かり  
 げに暗黒にして怖る可き秘義はゲツセマチと十字架とを掩へり。然  
 れどもキリストに此の暗黒あかりては吾人も亦必ず共に暗黒の  
 裡に在りしならん又必ず在を免れざらざる可からざりしならん  
 との一事は甚だ明白ありとす、是れ何れの時代の基督信者も——  
 素より其解釋には區別の差別あるを、此差別よりも更に深き  
 共通の經驗を以て——「彼は我等の愆のために傷けられたり」「彼は我  
 等の爲に死せり」「彼は我を愛して我が爲に己を捨てたり」と曰へる所  
 以にして、更に多言を費すの要なく、賢しき者と愚なる者とを問はず  
 之より以上に、又之より以外に言ふ可きの途あることを知るものあり

し。而して之を言ふものは「我」なり、「我等」あり。讀者諸君は此の如き代名  
 詞を用ひずしてイエスの死の大なる意義を述ぶること能はざる可  
 し。諸君が此等の代名詞を用ひ得る時、諸君は既に言ふべきものを言  
 ひ盡して、最早キリストの事實の最後の意義を發見せるものあり。  
 果して然らば、キリストの事實の最後の意義とは、彼が吾人に代りて  
 罪と其正當なる結果とを束ねたる倫理的秩序に原きて、整正の法を  
 講じ、以て宥恕の途を開きたるものと即ち是れなり。然り而して若し倫  
 理的秩序と相渉るものとあくんば、真正なる最後の神の宥恕なるもの  
 は到底有り得べからざるあり。此の如くして、イエスは初めて吾人を  
 して倫理的秩序其物たる「神」と和かしむるあり。之を其勢力の基礎と  
 して、此に始めて神と吾人との間に於ける友情に外ならざる其宗教  
 は乃ち起り來るなり。茲に吾人をしてかゝる見解を支持する二個の  
 大柱あるものと注意せしめよ。一は則ち倫理的原則にして、他の一は

則ち歴史的事實是れなり、道徳的宇宙の秩序を撤去し若くは曖昧に附し難きことは神の宥恕の原則にして、彼自身の言と彼の生活、品性及び人格の印象と、又基督信者の意識とに由りて説明せられたるイエスの死は其事實たるなり、神學上の術語に従へば、贖罪と稱せらるる大現象此二個の柱上には支持せらるゝあり。

多くの人は單に此點に止まりて更に進むを欲せず、彼等は贖罪の事實を承認すれども、之を解釋するを好まず、或はコールリツヂと共にこれ事實なり、而して事實の報告に由りて知るの外は、唯結果の如何に由りて其性質を論ずべきのみ」と言ひ、或はペットラルと共に、之よりは控へ目なる語を以て若し、聖書にしてキリストの満足は秘奥にして知る可からずとせば、吾人はキリストの満足の如何にして得られたるかを問ふことなく、唯寧ろ其分與せらるゝまゝに感謝して、其恩典に預かる可きなり」と主張せり。若し此等の見解にして、イエスの功績に由れ

る罪の宥恕中に含有せる所の原理は到底充分に脱き盡すと能はずと云ふにあらしめば、更に異論あるとなし。如何となれば、若し遺憾なく贖罪の意義を知らんとするものあらば、彼は神に於ける最大ある愛と、宇宙に於ける最嚴なる律法と、人類に於ける最暗黒の罪惡と、及び此三者の窮極の關係を知らざる可からざるを以て也。然れども、コールリツヂとペットラルの言ふ所にして、若し此大なる事實に於て一も道徳的合理的原理を辨識する能はずと云ふにあらしめば、此は全く許容す可からざるの見解と謂ふ可し。若し然らば、贖罪なるものは適當なる意義に於て宗教の事實と爲すと能はざるべし。如何となれば、宗教の眞理は思考力を有する者の生活の原動力とあり、且つ之を心服せしめ、又之に訴ふる所の眞理たらざる可からざればあり、故に其事實たる決して思想に透徹し得ざるが如き事實たる可からず、即ち不明瞭にして、不透明なる事實たる可からざる也。若し贖罪の道



理あることを拒まば是れ宗教より贖罪を放逐して、單に代數學的の事實となすものあり。素より罪なるものは吾人の測知し難き秘奥中に没するものありと雖も、——故に神の思想は我等の心のはかりより大あることを記憶せざる可からず——然れども單に秘奥のみなりとは謂ふ可からず。其原理原則は縱令知り盡すと能はずと雖も、必ずや進んで學び得べきものならざる可からず。且つ此等の原理は基督信者の思想と經驗とに對つて聲なき秘奥の暗黒を示さずして合理的道德的眞理の光明を示さざる可からざるあり。

斯く論じ來れば、此等の原理の説明に就きて此に數言を費やすは蓋し正當なる可し。此講演は勿論神學上の講演にあらず。且つキリストの事實の意義を明にするに當り第一には聖靈、次には基督學の教理を講演と共に併論するの必要を認めざりき。此等の場合に於ては宗教的事實は既に其自身充分の意義と價值とを有したり。然れど

も贖罪の問題は稍前者と異なる位地に置くべき種々の理由あり。吾人若し此の問題に關する思想曖昧なるものあるか或は誤謬に陥るが如きとあらば、贖罪の事實は其正純なる宗教的價值を有すること能はざるべし。故にイエス、キリストの贖罪に由れる罪の宥恕中に存する心靈的原理に就て、此に附論として二三の注意を追加する。とを得べきあり。素より其簡單なる梗概に過ぎざるは讀者の諒せんことを要す。

#### 附論 贖罪の原理

抑も人の罪惡を贖ふイエス、キリストの事業は、彼の生涯の新しい部分にあらざる也。單に全生涯を通して彼の目的たりし人類の救拯をして其慘憺たる終局にまで到達せしめたるものに外ならず。故に吾人が求めんと欲するものは新しい原理に非らずして、寧ろ彼の事業中深秘あらざる他の方面に於て、既に認め得べき主要なる原理の新しい

き適用に過ぎずれば、余は先づキリストの吾人を救はん爲に來るにつき人との關係中に於て原理たるものは何ぞやと問はんと欲するものなり。

今其原理の何たるやは、之を發見する難きに非らず。是れ既にキリストの事實を推究せる際、吾人の屢相接したる所のものなり。其事實に於て既に發見したる意義の最初の單純あるものを回想せよ。吾人が向きに倫理的な生活と品性とに對するキリストの意義を辨論せる時に當りて既に發見せる所のものは、彼は高尚なる教訓と最上の模範とを吾人に遺すに止まらず、亦其他に之れ以上のものありてふふとなりき。吾人は、彼が其の「靈」を吾人に與ふるを是れ即ち驚くべき方法なりと雖も、然かも眞實に彼は自ら吾人の思想感情及び意志中に入り來り、又此等の一部分となり、要言すれば彼は則ち吾人の部分と爲れりとの意義を有するを發見せり。最早我生けにるを知らず、キリ

スト我に在りて生けるなり。彼は吾人の更に善なる眞我の本名なり。基督教の特點實に此の裡にありて、佛教或は回々教の併行すること能はざるものありて存す。是れキリスト人との救拯的關係に於ける明白顯著ある要素にして、其原理は最も簡單に記述するを得べし。此原理はキリストと人類との合体即ち内部的の一致の原理あり。是れ「我は葡萄樹、爾等は其枝ありて」譬喩に於て、キリスト自身の語に由りて言明せられたる思想ありとす。又聖パウロは頭と肢体との譬を以て此思想を敷演したり。歴史上吾人に來り、亦吾人の内部に於て吾人と同一體と爲りしキリストとの心靈的一致——キリストは驚くべき有様にて、人たるもの、最善の我と同一體たり——は凡て彼と人との救拯的關係に於ける原理にして、吾人は之と相離れて基督教を論述すること能はざるなり。而して余は再言す、宥恕の根本に在つて横はる所の原理は新しき思想にあらずして、此同一思想

の更に進歩せる適用たるのみありと。吾人が見る所の宥恕問題は方に左の如し。神は宇宙の倫理的秩序の本源又支持者にして寧ろ秩序其物なり。而して眞に倫理的なる宇宙の秩序存するあらば、此秩序は必ず罪惡を宣告し、且つ罪惡と其審判とを「絞着せしめざる可からず。果して然らば、神は如何にして罪ある人類を赦す」とを得べや、而してキリストと人類との一致の原理は此疑問に答へて一反問を諷示し如何にして神はキリストを有する人類を宣告し得べきやと問ひ得るなり。若しキリストにして神が彼を離れて吾人を見給ふこと能はざる程に吾人と一体たらば、神は如何にして吾人に罰を宣告するを得べきや。此の一致實に贖罪の原理にして、基督教の何れの側面に於ても齊しく根本的の原理なれども特に宥恕の側面に關して新しき深遠ある意義と結論とを有するものなり。

最も卓越せる二人の教師の語を此に引照するもとを得ば、此新しき意義の果して何れの所に存するやを説明するに足るものあるべし。ルイテルの加拉太書註釋中に有名ある一句あり。彼は特に力ある語を以て、一の方向に向つて此の一致の思想を適用したり。彼は神をしてキリストに言はしめて曰く「汝は宜しく拒絶者たるペテロたれ宜しく迫害者たるパウロたれ、……要するに、汝は宜しく自ら萬人の罪を犯す其人たるべし」と。而してルイテルは進んで曰く次に律法彼に來り臨みて曰はく、余は彼の罪人たるを發見せり……されば彼をして死せしめよ」と此語はルイテルの意に於て別に不明の箇所あければ、爰に之か説明を要せざる可し。然れども他の卓越せる一人の記者は全し問題に關して他の方向に向つて此一致の思想を適用せり。マクシノオツド、カムベルの贖罪に關する著書は或部分に於て多少の批評すべき點ありと雖も、此種の著書中最も注意して研究すべ

きものなるか亦ルートルに似たる語調を以て謂て曰く試に人類の總の罪惡が一人の心靈に由りて犯されたりと想像せよ……且つ此心靈は悉く此罪愆を負ひ、罪より聖きに移り……遂に神の義を以て全く義と爲られたりと想像せよ、神の聖者にてありながら萬人の罪を負ひしキリストの立てる境遇は實際之の如き境遇にして、カムアベル謂らく此の如き義は是にて真正に當然なる満足なるべしと、換言すれば且つ之をルートルの語に對照すれば「律法の來り臨める」時其發見せる所は、彼即ちキリストは罪人と爲りて死せざる可からざと云ふには非ずして、寧ろ罪人キリストと爲りキリスト死して律法は満足せられたる也。

贖罪に關する凡の見解は大畧其取れる方向に従つて二個に區別することを得べし。一はキリストも吾人及び吾人の罪惡との一致に重を置き、罪を知らざるものを神我儕の爲に罪人と爲せりとし、他は人

類とキリストの一致に重を置き、一人の順に由りて多くの人は義とせられたりとあすものあり。夫れ二者其一を撰ばしむべき性質にあらざる者を對比せしむるは、智識上最も忌むべき誤謬なり。而して此二者の一を取りて他を排するが如きことあらば、是れ甚しき誤謬に陥れるものなり。此二個の見解は之を併せて維持せざる可からず、吾人は宜しく二個の方面に向つて贖罪の原理を研究せざる可からず、其明白なる理由は罪人とキリストとの同一體たる一致の原理に存すとす。而して一致は二者の一致なるが故に二個の相補ふべき側面を有し、又二様の結果を生ずるなり。若し果してキリストと其人民と一體たりとせば、キリストのキリストたる所より生ずる含意と、吾人の吾人たる所より生ずるキリストに關する含意と、二個の含意ありて彼の結論と此の結論と共に眞なるは蓋し當然の理なるべし。吾人は一面獨逸の學者の示す方向に従ひ、又一面蘇國の學者の示す方向